特8
702

097251-000-2

特8-702

政談鶴の一節

錦城斎　貞朝／講演

M27

DBS-1090

講談百種發行の趣意

近年世に小説の流行を極めたる時に當り誰彼となく皆な小説の著作に心を委ね利肆も又た其の出版を相競ふたりされども只だ一時の流行にあせりて良も悪きも出版さへすれば賣るといふ有様なり實に可惜良材も力なき人の筆に掛りて花も實もなき根無し草となり露品の片隅に些少の價の正札附となりし書物も多く是等の種類は固より文章共に拙なく人をして感情を惹起すに足らず凡そ小説をして能く哀怒哀樂猶興の情を感起せしめ恰も其の狀況を目前に見るが如く思はしむるの講談述記に如くのあらじ然れ共偶々直言若くの片言等のあるの口舌の儘なるに依て是を免かれずと雖ども而白くして解り易きは文章に能く綴り得ざるの妙あり因て本舗は茲に都下有名の講談師が各々得意とする古講談中最も世の好評あるもの百種を撰み号を重ねて陸續發行するの計畫を起したり而して其の講談は悉く世に有ふれの物と同一の類ひに非ざれば看客是に依りて初めて説の正しきを知り玉ふべし

序

樹木折べからず。堀内の魚を獲るべからず。とゝ今日の堀端の制札として是を犯すものは違警罪に問はれて罰金若くは拘留の輕罰を受る之れ今日の制なり、幕府の頃生洲の魚を獲て首を刎られ殺生禁斷の場所に砲弓を放つて嚴刑を受たる例も少なからず今世の人是を評して其頃の人間は魚鳥より價値なりしかと云ふものあれど蓋し將軍の威光を示したるものならん、本書に現はす所是れ又殺生禁斷の場所へ鶴を射落したるの罪科を以て千五百石の家名斷絶に至る伊東家鶴殺去の

椿談實錄小說を混交して能く因果應報の理りを說く其絶妙なる事一回を繙かば稿の匿の長きをも厭わざるべし

鶴涙居士述

702

政談鶴の一節

錦城齊貞朝講演
今村次郎速記

第一席

鶴の上總國山辺郡東金在田中村百姓取締高田傳右工門といへる者性來弱き情我慢にして悉とく百姓を苦しめ高利を貸附け領分八百石の田地畑を已れの所有にせんと計り居る中弘化の二年秋の取採り時に至つて百姓惣代金左衛門を呼んで傳「時に金左衛門お前いふは外ではないが當年は十二分の出來だに依て例年の二割方上納米を增す事をお前から小舞の者一同へ云い渡して貰ひたい然ういふ事よなればお前よも相當の利益のあるやう俺が計らうのらとの話し金左工門暫らく考へて居たが固より此人村中一統の目鏡に叶つて惣代をも勤めて居る者なれば正直潔白

の人であるから金「夫れ往きません當年は十二分の出來だといはつしやるが中々十分よも往ないぜ漸々七八分の出來であるが夫を二割方上納米を増すといへばどの位ぬ百姓が難義をするか分りません左樣な殘酷な事は小舞の者へ申渡す事が出來ません其の邊の所をば推察を願い升」傳「然うでもあらうが……」金「然うでも此うでも往きません曲つた事ハ私しは大嫌ひ正直の首に神宿るといつて何でも不正の事をして宜い譯の者ではありませんからどうも是は同意をする事は出來ません」傳「生意氣な事を云つしやるな」金「イヤ生意氣な事は云ひません不正直の事は出來ないと云のでは」傳「巫山戯た事をいふなデいいふが汝は人間の皮を被つて眞の道を辨へて居る者なら人の物を借りて置てナゼ夫を返さねェ人間並の口を聞くならば道に間違つた事をしねェが宜い」金「イヤ私はお前よ一文も借りた覺にはない三度の飯を二度に詰ても人樣の物を

借倒す了簡は更々ない」傳「ナニ借た覺にがねェと……人よ物を借りて置て忘れる程の耄碌をする年でもあるめへ何を言ふより証文が口を聞くサア是を見なせへと投げ出したる証文を金左工門取上て見ると

借用申金子之事

一金十五両也

右者此度御年貢上納金に差支借用申處實証也然る上は來る十二月晦日限り利子相添へ無相違返納可仕万一相滞候節ハ証人引受貴殿へ聊、の御損毛相掛申間敷依而借用金証書如件

百姓総代　金左工門

同親類　忠藏

弘化元年九月

高田傳右工門殿

と云て慥かに両人の印形までも捺してあります、金左工門ハッと蒼ろひたる處を立上つて持つたる煙管で眉間をポカリ金「ヤア打なすつたナ傳「打つたがどうした借た覺にがあるのないのと云つて首と、鐘換の印形を捺した證文是が何よりの證據だ……が今云ふ通り二割方の増納を小舞の者よ言渡せば此の証文も負てやる、サア何方とも返辞をしあせい金左工門涙を流し不正と知りつゝ名主の言葉に從ふやうでは一村の者に對して金左工門が言譯が立たぬといつて傳右工門の心に從ひません傳右工門大ひに怒つて傳「ヨシ借りた物を借ぬと言はれ夫んなら宜いと引込むやうでは一村の束をする名主の役が勤まらぬ幸ゝひ江戸に用があるから其の序で御勘定奉行根岸肥前守様へ訴へ出て上の威光で取立るから其時よ吼面をかはのすな覺えて居ろと悪口雑言金左工門は眼よ涙を一杯浮め宅へ歸つて來ると女房のおとん貞操正き、婦人

よて殊に評判の美人當年六ッになる悴の多吉といふ是ゝ疱瘡の爲めよ両眼不自由なるが此者を谷に負ひ糸を取て居る處ろへ歸つて來た良夫の面相常に變り殊に眉間よにじんだ血汐とん「ヤアお前の眉間についた其の疵はどうしたのでありますの噴嚏をするやうな人ではないよと問はれて金左工門ゝ涙を拂ひ金「エゝかとん聞て呉れ實は今名主傳右工門が「是々と云ふゆゑ小舞の者が難義を思ひ其言葉に應ぜぬ處身に覺にあれ借用の証文立涙に両人が判まで捺てあるのだがどうした事やら譯が分らず借りた覺えがないと云つたら無りやアないで江戸へ出て勘定奉行の沙白洲で立涙に裁判をつけて貰ふと悪たれ口を聞のみか烟管で眉間を此通りと話を聞て何思ひけん女房おとんット立上つて駆出るを金「コレおとん血相變て何處へ行くとん「イエ斯しては居られませんお前に對して申譯があいといふは思ひ出せば一昨年の秋の

事でありまたが名主より印形を持て來いと云ゆえ忠藏の女房と兩人で往た其時に今取込で居る程よ跡から捺て届けてやると の言葉ヨモ間違はあるまいと其儘置て歸つた處ろ二三日經て定使が持て來て呉れた故何の心も付ず受取て置ましたか今更思へば名主の爲めよ巧まれたか大切の印形をお前さんに斷へりもなく名主の處よ置て來たが私の誤りダに依て名主どんの處ろへ往き其の證文を取て來ます 金「夫へ不可ない心の腐つた傳右工門中が々道を説た處ろが聞て呉る氣遣ぬない近々の中よ江戸へ出て奉行の白洲へ持出すといふへ其場で勝の負るの二ッ決して心配する所ろでないと夫婦傳右工門の所置を恨んで居りまする中よ果して其の翌月よなつて高田傳右工門江戸表へ出府なし馬喰町四丁目の三鷹屋角兵衛方へ止宿へ致し御勘定奉行根岸肥前守へ訴へ出でました所願ひ通り早速金左工門忠藏へ差紙を附ました

から兩人も此うなるのらは奉行の白洲で立渡よ黒白を分て貰ふと兩人万事濃と合せて取る物も取り敢ず田中村を發足なし江戸表へ着して神田明神男坂下の合宿松屋新吉方へ宿を取り御喚出しの當日早朝より幸橋御門内勘定奉行根岸肥前守屋敷へ罷出ました頃て御喚込みに相成り正面御透しの障子を開き黒縮緬の御袴を着せられ腦朝の小刀を前半召し黒の串形の肩衣丹波縞の御袴を着せられ腦朝の小刀を前半に帶し一人の御小姓が御刀を持て跡よ扣へる前よ御用箱を置き右へ公用人左りへ目安方下役の人々威儀を正して一同に扣へる肥願人高田傳右工門對手方金左工門同じく忠藏揃つたの「揃ひまして御座い升肥先日願書を以て傳右工門より願ひ出でたる金右工門忠藏に對する年貢金上納の爲め貸し與へたる金十五兩今日よ至つて更よ返濟無之の旨全たく夫に相違ないな傳「聊か相違御座いません數回の催促に及びますれど彼是れ曖昧の事を申辨濟

を致しません甚だ迷惑を仕つりまする何卒速やかに辨濟を致しまするやう御理解を願ひ上升肥「金左衛門忠藏面を上げェ其方名主傳右工門より年貢上納金に差支へ金十五両借用ゑ及び期限を過ると雖も返濟致さんとの義通常の借金とハ異なり年貢上納に差支へて借入たる金子なれば所謂恩金といつて然るべきゑ何と心得て辨濟せぬか金左工門頭を上げ金「恐れながら申上升私し共に於てハ是まで御年貢金を一錢一文たりとも滞りましたる覺に御座いません固より致たして傳右工門より金子を借用致した覺に毛頭ハ座いません夫ハ同人言ひ掛りといふ者で御座い升其の譯ハ先日名主傳右工門方へ私しを招ぎまして是々斯様〳〵ゑ依て二割方の増納を小舞の者へヤ渡せとの事小舞の者の難義を思ひ私し之ゑ應じません處云ふ事を聞かねば貸した金を返せといつて証文を見せました固より致して借りた覺にも御座いませんゆ

ゑ書た覺にハ尚更ゆ座いませんが之に捺しましたる印形ハ確かゑ私し共の實印に相違ありませんゆゑ大きに驚き不思議の事と考へ居ります中ゑ煙管を以て眉間を打擲致し尚悪口雑言を吐きましたに依り殘念ゑ心得立歸つて妻ゑ斯々と物語りまするとヤすには斯様〳〵の次第全たく其の節証文を偽造られた者と存じ升どうか傳右工門へ御理解の義を願ひ度う存じ升肥「傳右衛門其方今聞く通りの義なれば名主役を勤めて居りながら不都合でハないか傳「イヱ〳〵決して私しに於ては左様な不正の事は仕りません苟ゑも一村の取締りを致しまする私し些かの金に目がくれて小舞百姓を苦しむる抔とヤす義は仕つりません全たく貸しましたに相違御座いませんゑ依りお上の御手數をも煩はす次第御賢察を願ひたう存じ升金「イヱモー何とヤましても私しハ金子を借用致した覺に御座いません肥「此の証文ハ金左工門其方が書い

たか　金「私が認めましたのでは御座いません　肥「印形ハ其方のぢやな　金「左様で御座い升　肥「忠藏はどうぢや　忠「印形は私しの に相違御座いません　肥「ウム　判紙を是へ……下役人判紙を夫へ差出しました　是へ両人の印形を捺させました處少しも証文の判に變りません　肥「傳右工門成程印形ハ少しも相違あいが此の証書ハ其方が認めたか但しは他の者が認めたか　傳「金左衛門が書いて呉れろとヲますから私しが認めて遣りましてゐ座います　肥「ウム　金左衛門其方ハ無筆か　金「固より百姓の事能くハ書ませんが両親が何うやら此うやら少しは手習ひも學ばせましたゆゑ証文位ハは曲りながらも認められん事ハゐ座いません　肥「此の証文に依れば年貢金上納ら差支へて借入れた金子よして十五両とあれば十五両の年貢金を納める位では餘程の高持と見にるなと流石は名奉行活眼を以て見破りましたハッと感ろいたる傳右衛門「金左衛門ハ小舞百姓

でゐ座い升　肥「ナニ小舞の百姓といへば俗よ水呑百姓ぢやな　傳「左様では座い升　肥「小舞百姓が十五両の上納金を納めるはずハ有まい　傳「イエ夫は年貢金のみでハゐ座いません　平常差支へある度毎人情合を以て聊かつゝ貸しましたる金が嵩りまして年貢金とも取集めて十五両よなりましたから証文に致しました　肥「默れ人情合で貸附し金に年貢金を取纒めて十五両の証文となしたるものに只だ年貢金上納に差支へ云々といふ文面を認めるから法があるか年貢金ハ公げの事合對の貸借とハ譯が違うぞ　傳「ハッといつたぎり傳右衛門頭が上りません　金左衛門忠藏がたりと思つたが首と釣換の印形を疎末にしたといふ落度が此方にもあり升、肥前守様之を充分調べる日になると傳右衛門も退役をヲ附ねばならず政府の御注意として今も昔も重罪は成べく輕罪を以て處分し罪の疑はしきは之を罰せず天下に罪人を出したくないといふ御仁

依て肥前守どうの是は穏やかに計らつてやりたいといふ思召しから肥「コレ傳右衛門其方は格別の勘辨を以て十五両といふを十両に負てやれシテ其の返済方ハ年賦を以て取立て遣はせ傳「ヘエ何程の年賦に肥「金二朱つゝ取てやれ二朱とヤせば只今の十二銭五厘何年懸るか知れん恐れながら二朱づゝといふ譯には参りませんと云はうと思つたが固より不正の廉がある事を御奉行様よ見込まれたと悟つたのら不服ながら據ろなく傳「畏こまりまして御座い升何卒両人へ御ヒ理解を願ひ上升肥「金左衛門忠藏十五両の内十両丈け返済する事として一時に皆済も出來まいのら二朱づゝの年賦にして返済致せ金左衛門忠藏相談を致し金「どうだ忠藏どん二朱づゝと云つた處が全たく借た金でハなし只だ楽るやうなものだからモー少し直切て見ヘエ……金「恐れ乍ら ヤ上升中々二朱と申ましては我々小舞の百姓に取ては大金でハ坐いまするゆゑどうか十六文か二十四文位ゐ年賦まして納めたう存じ坐います肥「どうぢや傳右工門二朱の年賦は出來兼るから十六文か二十四文づゝ返済をするといふがどうぢや傳「左様に存じ坐ります右様の義よては孫子の代に掛つても皆済に相成ません左様な不當な義は承知致し兼ますといふよ奉行も斯る手は隨分ある事で示談に致させた方が宜いとの思召し肥「コレ〳〵二朱と二十四文とは余程の相違能く互ひに譲り合つて示談に致したが宜らうといふお言葉でお下げに成りました双方腰掛へ下つて段々示談を致したが両人共充分よ勝口と思つて居るから次の手が強く中々承知ない傳右工門に於ても是を殘念よ存じたなれども據ろなく其の日は三鷹屋方へ立帰り奥の一室よ一人腕を組んで考へたが如何にも殘念でならんどうのして此の公事を引操返してやりたいと色々工夫を凝して居る中にフト思ひ付たは同村の百姓金七

の娘芳といふが十三の時世話する者があつて神田連雀町の何某方へ奉公中北の町奉行小田切土佐守の用人野上源助が手を付けて是を妾として月々一両二分宛送つて居るといふ事を思ひ出し此者の手引を以て北の町奉行へ取入り屹度彼奴等に鼻の穴をあのして呉んと飛脚を以て田中村の百姓金七方へ至急出府の義を申遣はしました金七に於ても名主の手紙ゆゑ何事かと思ひ取る物も取敢ず致して出府致し三鷹屋へ參つて傳右衛門へ對面をすると傳「扨是々斯様」だがお前の娘の手引を以てどうか野上源助さんに目通をして歎願の義があるがどうの取合ては呉んか茅出度此公事に勝てばお前を充分に取立てやるが何と承知をしては呉まいか金「夫は宜しうは坐いますが金子が少ち入ります傳「金は何程掛つても宜い夫ならばと二十五両夫へ出しました如何よ倉懲非道の傳右衛門も意氣張づくになつては金の掛る事も厭いま

せん金七は右二十五両を菓子折の中へ入れて小田切の屋敷へ參り野上源助と面會の上にて段々と前申上ました通りの話を致し何とか工夫を願ひたいといふに野上はシカと考へ右の菓子折を携へて一室へ通入り菓子折の貫目を見ると今のやうよ札と違つて二十五両の金は余程目方があります野上源助腹の中に默首再び立出て能々考へた處格別面倒の事もないに依て斯様々々計らふの、ら心配するなと今日にても偶にはありますが昔しは賄賂をんふ者が行はれ金の爲めに理を非に曲て裁判をする役人もありましたのら傳右衛門が不正の願ひも金の爲めよ聞届けられ直ちに金左工門忠藏へ差紙が附ました両人も仮令何處へ出やうとも天道様は誠實を照す上よお出なさる方に曲つた裁判を成さる譯がないと北の町奉行所へ出張を致した處ろ祿々のお調べもなく金子速やかよ返納の義を申渡されました両人が慾ろきに引換へ

で傳右衛門はまたりと滿面よ喜色を現はしました兩人は暫らくの猶豫を願つたが一日丈けの猶豫を許すといふ事兩人は無念の涙にくれて立歸つたが金「扨て忠藏どん如何にも口惜いではないか一旦沙勘定奉行でお裁判よなつたものを斯云ふ依怙贔負の裁判をするといふは大方賄賂よ目がくれてした事に違ひない斯なる上は仕方がない私も覺悟を極めました佐倉宗五郎と云ふ人は小姓の者の難義を見兼ね一身を棄て將軍樣へ駕籠訴をし我身のを女房子迄も重き罪に行はれた其代りには小舞の者の難義を救ひ役人の邪曲も打破つたと云ふ事私も宗五樣よは及ばねへでも村中の者の爲めよやうかして傳右衛門を討果して仕舞はうと涙にくれて物語る金左衛門が百姓ながら一心凝たる丈夫の魂ひ忠藏も止め兼て己れは家の事を呑込んで立歸りました乃で金左衛門は旅籠屋の勘定を濟せ必殘りのないやうにして馬喰町の

三鷹屋角兵衛方を苦して來つたが金「沙冤下さい三「へエお出でなさい金「私しゝ山邊郡田中村の百姓でゞ座いますが名主どんが此方に逗留にならしつて居なさるに就てお目に掛りよ參りました三「ハア然うでげすか作や田中村の且那は何うした作「昨日呉服橋の沙奉行樣のお屋敷へお出でよなつたぎりまだお歸りがありません三「ぢやア田中村の且那樣は呉服橋の北の沙奉行樣の沙屋敷へ行て沙用人の野上樣に泊つてお在でに違ひない、マア且那も一且負た公事も漸やく北の御奉行樣のお裁判で勝公事よあつたさうで先方の奴は悄然として歸つたといふ咄だが幾ら太エ奴でも天道樣が光つてるから惡い事は出來ません借りた物を借ないんッて濟む譯の者ぢやアありませんかねエと何にも知らぬ宿屋の主人が知た振して咄を聞き金左工門は齒噛を爲して殘念と思へども目差す敵は夫に居ず傳右衛門が此所よ居たならば飛掛つ

て咽喉をめめ先を殺して自分も死なんと思ひしも居らぬ者は詮方なしと素知らぬ顔にて金「左様で御座りますの、夫でハ北の御奉行様の御屋敷へ参りませうと北所を立出で野上の家へ乗込んで仕儀によれば用人の野上源助初め家中の者も切殺さて此の恨みを晴さんと途中で或る鉄物屋へ立寄て金「小刀を一挺か貰ひたい」「畏とまりました是は如何で御座い升……ヘエ最些と大いの此方なら餘程物も宜くなりますす是なら人の三人や四人殺すなァ譯エありません帳場の中のら主人と見にて主「此の馬鹿野郎朝ッ原から人の三人や四人殺すのは譯エないとは何の事だどうかお客様御勘辨を願ひ升此の野郎ハ馬鹿でも座れますからどうぞ御氣にかゝなさらんやうに金「イヤ氣に掛る所ではない小刀よて切れなければ何にもならないと腹の中では宜い前兆と喜んで一挺の小刀を求め手拭よてくるみ懐ろへ入て是より呉服橋へ掛り小田切

の御門を這入て行くと門番が「コレ〳〵通り抜の往來ではない何と心得て居ると傍へ來て懐ろへ目を附ると相憎懐ろの中からチラリ見にたのは小刀の先當「ヤアヤ已れ刃物を持て居るなと壁を掛なければ宜いに大聲を揚たのらモー是までと思ひけん金左工門突然懐ろよ持たる小刀を逆手に取て胸元の處ろを充分よ突きましたから何に以て耐りませうや急所の痛手に只だ一刺ウーンといつて其場へドウと倒れました金「ウム馬鹿野郎獣つて居れバ宜いものをハヽ軍陣の血祭り只た一突でおつ死よやァがつた大痴漢めと血を拭て小刀を又た懐ろへ入れ門前か脇にさしたる一刀を見れば新刀ながら手頃のものこれ幸ひと夫を引提げ黒塀について長屋の方へ曲つて來ると切戸口に野上といふ標札の出たるハ正しく用人野上源助の住ひと知り切戸のかきがねの外れて居るを幸ひに庭口から密かよ忍び入り樣側へ上つて密と障子を明る

と丁度朝御飯が済んで主人の野上源助が支度をいたし御新造が後ろへ廻つて袴の腰板を附て居る後ろへ扳刀を提げて突立たから振返つた野上源助已れ曲者といふ途端に踊り掛つて一太刀浴せたアッといつてよろめく處を覺悟をしろと百姓ながら一心籠たる切尖に何ぞ堪らん其儘其所へ倒れました妻女は此時人殺しいと呼坊主が憎けりや袈裟までの例へ後ろから切込んだ奴が肩先から乳の下へ掛て切下げましたなる小兒是を見るよりキャッと驚上げ逃げ出すを横よ拂つた倒れる奴を返す刀よ小兒の首を切て落す奉公人等は座敷の騒ぎに主の大事も顧みず皆バラ〳〵と逃出す中よ妾のおよしは逃げもやらず艙の影にガタ〳〵と震へて居るを探ねあてたる金左工門文錦の高島田を根のらグザと掴りたれば元結は切れて丈の黑髪後ろへサッと乱れ〻ば其儘確かと引掴みドウと倒るゝ面を見て

金「ヤア已れ金七の娘およしめか今度の公事の負たのも汝らが口から橋渡し覺悟をしろと散々に弄り殺しよして終つたが肝心の傳右衛門は何所へ隠れたか影もあい尚樣の下から天井までも捜ためたが居りませんこうなると金左工門幾ら度胸が宜つても人を殺して逆上たものと見に血刀を引提げ御殿へ侵入よ及ばんとしたのらソレ狂人といつて多くの捕手前後左右を取卷て生捕らんとすると雖も此方は死物狂ひの手狂人腕に覺にはなきとても勇氣の爲に切まくり其の勢ひ何れも之に當り兼ねアレヨ〳〵といふばかり手疵を受け又たは切倒されたる者もあり屋敷の中は去ながら鼎の沸が如きの大騒動斯る所へ天眞揚心流の大先生橋本大作といへる人透を伺ひ踊り掛つてヤッと一聲物の見事に投げ倒し押し掛つて滅々と縄を掛て終いました實に氣の毒なる金左工門終に高手小手よ縛しめられ太切の人殺しの罪人ゆえ

厳重に警衛される身の上とは相成りました然るに運の宜い奴は傳右衛門一足違いで屋敷を出た跡へ金左工門が乗込んだのでは座いますから些かの所で一命を助かりました憐れむべきは金左工門人殺しの罪科逃るゝに由なく遂に獄門梟首の刑よ行はれました

第二席

お話二ッよ分れて傳右衛門は勝公事で打勝んで立帰つたが茲よ金左衛門の妻子ゝ良夫が捕はれの身となりしと聞き未だ獄門になつたとゝ知らず深く心配をいたし村内に於ても心ある者ゝヤレ〳〵氣の毒の事であると涙に暮れぬ者もなく殊に忠藏は已れが先よ歸りて後の事なれば一層心を痛めて居たが俄よ病ひを惹起し敢なき終りを遂げました是も傳右衛門が事からと人々もいと〻憫れに思へども對手が名主の事なればどうする事も出來ず

無念を耐らへて居る中に金左工門の妻のゆりん早や今月ゝ臨月力と頼む忠藏ゝ相果て外に親戚といふゝ我が弟の倉吉といふがあつたれど是ゝ放蕩頑情の性質よて惡事を働らき世に聞き身となり居れば今ゝ何處よ居るとも知れず相談對手もなきまゝに兎にも角にも江戸へ出て夫の生死を聞んものと悴多吉の手を引て心細くも田中村を出でましたが今よも落ん妊娠の身体殊に盲目の子を連れたれば道の歩みも捗取らず漸々日數を重ねて江戸の地へ着いたし人に聞き〳〵小傳馬町の牢舎の門へ差掛れば門番三人夫に居りまして番ヤア身持の女がお盲目の手を引て何を迂路〳〵して居るのか……りん「御免下さいまし私しゝゝ上總國山邊郡東金在田中村の百姓金左衛門の妻りんと申す者で御座います是なるゝ悴の多吉夫金左衛門入牢の處何よも知らぬ盲目の子供親父さん〳〵と申しまするが如何よも不便でなりませず姙身の身

体で手を引て漸と是まで參りましたぞうぞ夫金左衛門の安否を伺ひ度う存じますが如何相成りだ……エー金左衛門ハ斬罪獄門にあつた……ウム腹が大きい……お内儀さん何月だいりん「ハイ臨月で御座い升甲「臨月だ……何うしやう折角尋ねて來て亭主が獄門よなつたと聞たら女といふ者ハ氣が小さいのらアッと思つた杓子よギャアと分娩をされた日よやア事だ死だものを生てると嘘を吐く譯よは往ず……アーモシ内儀さん此の門を通入つて往くと茅葺屋根の處があるから其所に小屋者が居るのらお前の亭主の金左衛門ハ何うあつたと云へば安否ハ知れるりん「有難う存じ升……少々伺ひ度う御座い升○「アー何だりん「アノ小屋者のお方は此方で御座い升か○「巫山戯るな小屋者には違へねへでも何とかいひやうがありさうなものぢやア無へか●「怒るなエー怒るのハ修業が足りねへ小屋者で無へものを小

屋者だといはれたら腹も立つが其の通りをいつたんだキッと田舎者に違へねへ……ヲー内儀さん何處から來たりん「上総東金在田中村の百姓金左衛門の妻りんと申升此方樣で夫の生死が知れると伺つて參りまして御座い升ぞうぞ安否をお聞せ下さるやうよ願ひ升△「ウム然うかヲー金左衛門ハ何うした○「百姓の金左衛門ハ疾よ斬罪ぢやアねへか△「然うの可愛想に此うして親子で親や亭主の身の上を心配して尋ねて來たのをお處刑になつたと聞たら嘸驚くだらう腹が大きいやうだが聞て見や○「ナニお前は身重かりん「ハイ臨月では座い升△「ウム夫だから門番の奴が此方へ聞きよ遣したに違へねへ茲で死んだといつたら驚ろく途端にヒョッと飛出された日よやア大變だのらなア……アノなア内儀さん乃公の力でも分らねへ事はねへけれども折角來た者だから委しい事も聞たからう其の変しい事を知るにやア回向院の下屋敷へ行

けば直ぐ解る彼所へ行て坊さんよ聞て見りやァ直ぐ知れるりん「有難う存じ升餘程遠方でゞ座いますか△「江戸の端れだ是を左へ行て横山町の通りを淺草見附へ出て藏前通りのら眞直よ觀音樣へ着て觀音樣を左りよ見て……●「ヲイ〳〵然う叮嚀に敎へたつて田舍の人よやァ却つて分られへ夫よりやァ觀音樣よ敎へてやつて那所で又た先を聞た方が宜いだらう△「ウム然うだなァ何しろ可愛想だ子供は幾才だエ……ナニ六才ヨー〳〵疱瘡で目が盲れたのへ握飯が五ッ六ッあつたッけ是をやらう……サァ坊やか腹が空たらう握飯を食ひなりん「種々とゞ親切切樣に有難う存じ升とおりんゝ多吉の手を引て回向院の下屋敷と聞き〳〵尋ねて行く親子の心中慣れといふも愚かなる事であり升「阿母さんモー俺ァ歩行けない足が痛くつて……りん「アー嘸疲勞たらうモー少したのら我慢をしてお出で今よ親父さんよ逢るからと牢舍で貰つ

た握り飯を食べさせながら手を引て來つたは千住小塚原回向院下屋敷今ぢやァ那の邊ゝ大層繁華になつたが其時代の事でゞ座いますから誠よ那の邊は淋しうゞ座いましたされど怖いも淋しいも良夫を思ふ一心に少しも厭はず門を這入て案内を問へば一人の坊主頻りに諦經を致して居りましたが坊「お出でなさゝ何所のらお出でりん「私しは上總東金在田中村の百姓金左工門の妻うんとヤ升が良夫の安否を知たく存じ態々江戸へ立出でて小傳馬町の牢舍で伺いました所此方へ來れば詳しく知れるとゞ親切に敎へて下さいましたゆゑ漸々是へ參りましてゞ座い升どうぞ不便と思召して金左工門が安否をばゞ聞せ下さるやう願い升と涙を流し手を仕て頼を入る坊「夫ゝァ遠方を態々ゞ亭主の身の上を案じて來られたといふは感心の事併し態々私の方まで來ないでも小傳馬町の門番でも小屋場でも知れさうなものであつた

に……待ちなさいよお前お腹が大きいやうだが妊娠かねりん「ハイ臨月では座い升坊「夫で分つた罪のことをかしえて死んだを聞して子でも產れては大變だから夫で此方へ向けて遣したッだなモ！此方からは何所へも向けやうがないエー仕方がないヤア內儀さん確乎氣を持て居なさい宜いのへと燈明の明火を搔立て罪人の名前罪跡なぞ記えてあるものがあるのら夫を取出して坊「內儀さん是よ書てあるのら讀で聞せやう宜いかへ氣をしつかり持てよ……エー常陸國茨城水戸無宿三次此奴は盜賊放火の三犯ものだ上州佐位郡境村無宿藏藏强淫押込此つでもない武州熊谷無宿の竹藏……エー上總國山邊郡東金在田中村ウム是だ〳〵百姓金左工門……門サア大變だ內儀さん確乎しなさいよお前の亭主の金左工門へ百姓よ似合ない豪傑だ侍奉行樣の屋敷へ乘込んで四五人の人殺しをしたんだ可愛想よ遂々打首の上獄門だ幾ら泣いても歎いて

も返らねへ此うなつたら諦らめてお腹の子供も無事に產み身体を大事に子供達の成長を樂しみなさるが上分別りん「エー扨は良夫金左工門は所刑になりましたかコレ多吉聞いたか悔あい事になつたッィ定めて金左工門殿は口惜からう……エー恨めしいは傳右衛門アイタ、、、、和尙さま相濟ませんが虫が被つて參りまたゆえどうぞ腹を……坊「ッレ來なすつた飛だ者を持込まれたと思つたがどうも仕方かない坊「確かりしなさい〳〵りん「濟ませんが水を一杯頂だかして下さいまし坊「ッレ水……氣を確のり持て……どうも是は弱つたな取揚坊主へ初めてだ此邊の所か此所が痛いか苦しいかなと傍りに人は居ず唯一人頻りに介抱をして居る所へ通り掛つたは年齡四十二三の立派な男何か女の苦しむ聲が聞へるから立留つて樣子を見るに坊主が獨り手よ餘つて介抱をして居るゆえ見兼て夫へ近寄て段々仔細を尋ねると是々の譯

どうぞ手を貸して下されこの人は上總東金在田中村の百姓金左工門の女房にて伊東主の身を案じ目の不自由な子を連れて態々尋ねて來た所伊東主がお處刑になつたと聞て驚ろいたあまりに虫が冠つて來た樣子斯うゐふ事よは馴れぬ出家只だヤ〳〵して居ましたどうぞ一ッ伊迷惑でも手傳つて下さいまし男「ヤレ〳〵夫は可愛想よ併ち能くお前さんも面倒を見て上なすつた兎に角此所では產も出來まいが私は堀の八百膳といふ料理屋の主人だがまだ汐時も早いから少しは間もあると思ふが何うのして家まで連て行て產せてやりたいが私が茲で介抱をして居るのらお前さん御籠を一挺めつけて來てお呉んなさらないあ坊「ヒ、宜しうは坐い升と坊さんも飛だ災難を免れるやうなものだから喜んで表へ飛出したが頓て一挺の御籠を連て來たからッッと是へ乘せ身体を操ねやうに苦しむおりんよ氣を爲まし御籠に乘せて多吉

の手を取り親切よも我が家へ連れ來つて樣々に手當をいたしたゆゑ間もなく產み落したれ玉のやうなる女の子是で後に五千石の旗本伊東主膳秀虎といふ伊方の愛妾となり天保時代世上よ名前を殘したかつるといふ貞操なる婦人と相成る所の後の咄し斯くて八百膳夫婦はいと親切に親子の者を世話して呉れますからおりんの喜びは大方ならず產後も別よ變りなく幾日なくして元の身体となりましたが或日の事同家の主人よ向つてりん「段々とのは介抱何とも御禮の方上やうもは座いません便り身寄のないし私のやうなものに斯くまで御親切を下さるは恩の程決して忘れは致しませんどうぞ厄介樣に成りまする間はは奉公人衆の洗濯抔私しへ仰せ附られて下さるやうにと百姓の妻に似合はず針仕事なども よく爲し誠に行儀の正しい婦人ですから人々に亞寅がられて居りまするけれども又た悴の多吉は俐怜のやうで

も年が往く目が不都合だのら種々疎勿をしたり座敷を間違へて飛込んだり遠慮なく悪戯などを致すから夫を誠にお気の毒は心配をして居るのを主人の善四郎も夫と察して或る時一室へ呼んで「善時にお気の毒さんお前方を邪魔として往て呉れろといふ譯ではなく殊よお前が居て呉れゝば重寶でもあるから何年も居て貰ひたいのだが利口のやうでも悴の多吉時々疎勿などをするのを見て心配氣に見ゆるのが私にも分る夫に就て一寸咄があるが私の極懇意の人の家作で下谷山伏町へ空た長屋があるとれふから其所は私が万事引受けて店請も何も入らず家賃も私が拂つて上るのら狭くて窮屈ではあらうが當分夫へ世帶を持てお前も人の洗濯釣仕事などをするものだのら内職をしてやつて往たら何うだらう多吉い其中然るべき校校でも頼んで療治の修業でもさせるやうに私も心掛るからと情も餘る親切の言葉お気の毒さんい有難涙に

暮れまして「さん」何から何まで種々と御親切よ去て下さつて何とも御禮の申上やうも御座いません此上とも又た御心配を掛ましては誠に恐入りますが便り身寄りもない身の上どうぞ宜しいやうに願ひ升と両手を仕て頼み入る主「エヽ宜しいお前さへ承知なら直にも然ういふ事にして米なり味噌なり入用のものに差支へる時は何時でも取りよ來るやうよしてヒヨツト行立たない時は慮をして居ては分らんから心配なく相談よ來なさい又た宜いやうよ工風も附やうのらと茲でかりん親子い山伏町の九尺二間の棟割長家へ新世帶を持ちまた其翌年八百善の世話よて此の多吉を浅草梅窓院の境内に居る杉山流の玉川撿校方へ五年の年期で弟子入をさせ正覺と名を改めました所が此の正覺固より利口者であるのら些、あの中よ療治を覺に後の雁が前になつたの比喩の通り先入の者よりは腕も達者になり師匠の用ゐも自然宜

しい只今と違つて以前は九十八文の療治代を取るよは足掛四年目夫から師匠へ恩返しを何年かしなければ自分の身体にはならあいと云ことです検校に於ても便りがない者であるから早く母親の手許へ返したか宜らうと一年の年期を負て足掛四年で夏冬の仕着せを着て阿母さんの手許へ往て手助けよ療治でもして今日の生活を立るが宜いといはれ正覺れ涙を流さ喜んで足掛四年目で母の家へ立歸りましたおりんの喜びは喩ふるに物なく是といふのも八百善さんの庇蔭だから山谷の方へ足を向けて寐てはならんとまでに思ひ正覺は晝夜の別なく那方此方を流して歩行ます所が感の宜い盲目ではあるが何しろ年の往ない事だから夜分など子供よ悪戯をされ又ハ大八車よ突當りなどするが誠よ可愛想でならんから夜るだけは手を引てやらうとおりんがおつるを背負て正覺の手を引き按摩上下四十八文と流さて歩行く中よ

或る小雨の降りまする折でどざい升淺草の溝店のお祖師様の横丁へ曲つて來ると藏前十八軒の札差の中小玉屋庄左工門の隱宅藏の二戸前もある立派の構へ其前を流して歩行きますと女「按摩さん〳〵」正「ヘエ何方様女「此所だよ〳〵」正「ヘエ〳〵」女「アヲ子供だね」正「ヘエ子供でげすよけれども療治は巧手に致しますからどう卒ひ願ひ升山椒は小粒でピりと辛ひ大人だから巧手といふ譯はありません小粒のピりゝを一ッお試し下さいりん「コレ正覺何故然んな事をいふンだ大きな聲で……主「ィヤ面白い事をいふ按摩だチィ子供でも揚はんのら呼で呉れ〳〵」女「ハイでは此方へお這入り」正「ヘエ有難うでざい升」女「お前さんは阿母さんかへりん「ハイ有難う存升と中へ這入ると火鉢を間にお妾のお玉さんに酌をさせて一杯飲ながら主「サア此方へお出で阿母さんも此方へお這入り寒からう火を上げな中々大變なものだりん「どうぞお揚ひ下さいま

すな主「存負てるのゝ此子の同胞かねりん「ハイ妹で御座い升主「アヽ夫ゝ樂しみだねへ按摩さんお前のお師匠さんは何といふエ正「ヱヽ玉川檢校の弟子の正覺といふのが私しで御座い升主「アー孝行の評判の正覺といふはお前のへ話や噂よ聞てるが感心なものだマア殺くり休んで往なさいどうだエ雜煮ゝ喰かへ正「大喰でございい升主「然うかへ夫ぢやア寒いから阿母さんと一緒にお食べ丁度今拵らへたばつかりだりん「有難う存じ升どうも且那樣遠慮のない子で困り升主「ナアニ子供の遠慮するのは往んものだと下女のおさくに云い附け雜煮をよそひ箸を添て出しました親子喜んで之を食べ畢るを待つて主人は紙入から一兩の金を出して紙に包み主「サア是は少ないが療治代の代り正「ヘエ有難う存じ升阿母さん且那が此ンなにお金を下すつたよりん「マアほど馳走になつたりお金を頂戴したと有難う存じ升正「ダハ且那樣御療治を致し

ませう主「療治はどうでも宜いからマア今夜は早く終つて歸るが宜い正「夫でもどうもほど馳走ゝ御馳走商賣は商賣でげす主「成程是ゝ面白い併しマア今夜は降るから又天氣の好い晩にゆつくり療治をして貰はう正「左樣でげすの夫は有難う存じ升ぢやア今日は御免を蒙ります阿母さんダハ遲くならない中に歸りませうりん「どうも皆さん有難う存じ升と親子厚く禮を述べて木綿のねんねで妹を背負ひ正覺の手を引てかりんが出やうとする時妾のお玉が玉「且那樣妾しが拵らへて頂いた頭巾をアノ正覺の阿母さんに遣りたいと思ひますが如何で御座いませう主「ウム感心だ能く氣が附た人間は何でも情心のなければ往んお前よは又た拵らへてやるからやんなさいゝといふのでお玉が縮緬の頭巾を奉公人に知れては面倒と思ひ内証で玉「モシ阿母さんお待ち且那よ拵らへて頂いたばつかりの頭巾だが寒ひのら之を冠つてお出で奉

公人に知れると蒼蠅いから内証で上るんだよりん「どうも何より の品を有難う存じ升玉「浮世離れも何も入らないからッッと持て行て お呉れりん「ハイ長とまりした有難う存じ升と外の者よは知れ ぬやうよ縮緬の頭巾をもらつて打喜んで此所を立出でましたが 此の頭巾をもらつたのが却つて正覺親子の災難になるといふか 咄しい次よヤ上升

第三席

さて小玉屋庄左工門の隱宅を出ると向ひ風で眞ともに雨が顏に 降り掛りますから傘を半開きにして行く向ふから來てポシと突 當つた一人の男アイテーヤイ何だつて人に突當りやアがるんだ 氣を附やがれと拳を固めてポカリ正覺の横ッ面を毆りました氣 の強い正覺だから負て居ない「何を毆ちやアがるんだ目明の方 で突當つて毆る奴があるものか男「ナニイ目明が手引に附て居て

前よ人の來るのが分らねへあるりん「マア廷潤して飛だ失禮を致し ましたは免なさいと傘を横よしながらキッと見てビックリりん「 ヤ、お前い倉吉ではないか男「ニーッ然ういふお前い……チー妹ェ のアー濟なかつた勘忍して呉れ此の接摩はエーお前の悴の然う か初めて過つたがぢやア乃公の爲よい甥だなア然うと知つたら 毆ッたんぢやアなかつた名は何といふッたエー正覺かハーサー 正覺勘忍して呉れよマア姉ェ乃公にいふ事もあるだらうが此所 ぢやア咄も出來ねへから兎も角お前の居る所へ一緒よ行う何所 だナニ山伏町夫ぢやア譯ェねへ種々話もあるからと茲でおりん は弟の倉吉を山伏町の住へ連て參りまして段々と身の來歷を物 語ると惡人ながら倉吉は涙を流し倉「アーお前も然んな苦勞をし たのかマア乃公も若い時分は了簡違ひをして親を捨て家を飛出 し親同胞よ迷惑を掛たが今更後悔をして居るのよ丁度此所で過

つたのが幸ひ是から了簡を入れ換て仮令飴菓子を貰らうと堅氣になつてお前にも安心をさせるからどうぞ以前の不義不孝の勘弁して呉んなせェ就ちやァ乃公も今何所といつて定まつた居所の無へ者だが長くといはあいのらどうぞ暫くお前の家へ置て呉と其儘倉吉はかりんの家の厄介に成て居る中に或る時正覺へ

正「伯父さんお前さんに話をしやうと思つて居たが今日は丁度阿母さんが八百善さんへ往て居ないから話をするがお前さんたつてャ立派な身体を持て居ながら目の見ない私だの阿母さんの仕事なぞをして些かのお銭を取てるのを的よして遊んで居ちやァ仕様がないあら何かしたら宜いぢやァ無いの倉「然うよなァ質へ飴菓子でも貰るつもりなんだが何をするよも資本が入るンだ就ちやァ朋友よ些とばあと貸もあるのら夫でも取て資本よしやうと此う思つて居たのよ時に正覺お前の阿母が宜い頭巾を持て居るが那ァどうしたんだ

正「ナニ那ァ療治先て貰つて來たんだ

倉「フーム那んな物を呉る家てェば餘ッ程宜い家だと見るな

正「アノ溝店の小玉屋の隣居所で一日置二日置位ぬに始終往ちやァ種々厄介よなつて居るのさ

倉「然うか夫てェのも汝が親孝行といふ評判があるので人が世話をして呉るんだ何でも伯父さんのやうになつちやァ仕様がねへなァ併し然ういふ得意があれば宜いなァ宜いけれどもャァ汝だの阿母が始終然う世話になつてるお家であつて見りやァ江戸は火の中といふ位ぬ何日何時ダャンとぶつゝけめいものでもねへ其の時にお驚々しい事で正覺の親戚の者でござい升ほ手傳ひに參りましたといへばァー正覺は感心だ能く手傳ひを遣したと一層最負よされやうと思ふンだが何處の所だの歟へて置て呉れねへ

正「成程火事でもあつた時にやァ私しやァ盲目で手傳ひには往ずャァ伯父さんでも氣が附て往

て呉れば誠よ義理も立譯だから何分頼むよ家は是々斯ういふ所だと正覺の咄を聞た倉吉何か心よ點首て居りましたが倉「時に正覺今もいふ通り明日にも乃公ァ商賣を初めてエと思ふがお前達に資本を貸して呉れとも云ひ悪いから朋友よ貸した二三両取て來てエがどうて對手ハ道樂者で家に居るか何うだの分のらず又た居た所で久しぶりだから泊つて往けとでもいはれると一晩位か泊つて來るかも知れねへのらモシ歸らねへでも案じないやうよ阿母よも然ういつて呉れよ正「アーナニ一晩ばかりでなく正の儘歸つて來ない方が宜い位かだ倉「悪まれ口を聞くなと目の不自由な正覺か人の擧動の分らぬを幸ひ臺所へ往て磨ぎ澄してあつた出刀疱丁を手拭にくるんで内懐ろへ入れて正覺の家を飛出しましたがまだ刻限が早いから淺草並木の廓へ這入てはねるのを待て表へ飛出し度胸定めよ二三合引かけ刻限を計つて來たのは長

延寺横丁の角で立涙の住ひで座い升表の天水桶へ足を踏掛け塀を乗越へ入らんとする時一犬虚を吠て万犬實を傳ふ忽ち十數疋の犬何所よりか飛來つてワン〳〵〳〵と烈しく吠る奴を乗て用意なしたる竹の皮包みの餅切をバラ〳〵と投つてやると喰ひ地が張て居るのら犬は有難う存じ升とも何ともいはずムシャ〳〵やつて居る中よ天水桶を踏台に塀を乗越へ庭へ這入て雨戸をゴソ明け抜足差足忍んで見ると六畳の間に四畳半の小座敷があり少し隔つて土蔵前に一寸した座敷がある是に庄左工門と妾のお玉が寐て居りまする倉吉ハ頭冠りで顔を隠し出刀疱丁を持て庄左工門の枕邊よ突立ち倉「起ろ〳〵と云はれて庄左工門目を覺して見ると曲者駄つて居れば殺されはしないが生兵法は大疵の基といふ諺の通り少し剣術も習つた事があるから乗て護身の爲に枕許よ搦へたる脇差を取て立上り曲者といふ壁を上るや

脇差の柄に手を掛る間もなく倉吉がユーと突込む出刀疱丁で腹をにぐられアットいつて其の場へドウと倒れたる其の物音に目を覺した妾のお玉人殺しいと逃出す奴を飛掛つて後ろから襟髪取て引倒し胸許をばグサと刺せばキヤツと魂消る聲と共に其場に息は絶たとけり下女のお金は此の物音を聞附て扨ハ盗賊が入つたと思ひ夜具を冠つて題目を唱へ居るとおさくは年をとつて居るだけ機轉がよく雨戸を開け金盥を火鉢を以て引掻き廻し盗賊〳〵と動鳴たから忽ち近所の者が聞附けッレ小玉屋の隱宅へ賊が這入たと寮卷姿で棒ちぎりを携へて飛出して來る樣子此つぶつた見附つては大變と何一品取らず周章狼狽倉吉は此所ろを逃去りました跡へ大勢走せ集つて見ると二人とも無慘の最期早速自身番へ知らせ尙近所の人を頼んで本宅を初め親戚一同へも通知に及んだから早速悴庄助を初め夫々走せ附て參り檢視の

役人も來まして死體を檢ためると刀物ハ出刀疱丁疵所ハ兩人とも急所よ掛つて居り升役人「庄左工門悴庄助其方の住居は何所だ」庄「藏前片町で侍座い升」役「年齡は」庄「二十六才でござい升」役「當家家内の者は何人居る」庄「妾の玉ょ下女のさくきんの四人で侍座い升」役「父庄左衛門は何才だ」庄「四十八才でござい升」役「四十八才で隱居といふは早いでハないか」庄「左樣でござい升父ハ病身でございまえて繁業に就て居られませんゆえ早く隱居いたえました」役「其方が戸主であるな」庄「御意で」役「庄左衛門は酒を深く飲むか」庄「深いとヤすはどでハございません一合か一合五勺位ゐつゝ毎夜嗜なみます」役「妾の玉といふ者は何處の者だ」庄「是は池袋村百姓の小作といふ者の娘でござい升」役「親又は當人が性質はどういふものだ」庄「誠ょ實体の者でハ座いましたが兩親とも早く　しまして今は外ょ便る者もございませんゆえ父が目を掛て遣ハしまえてハ座

い升　役「常に恨みなどを受るやうな事へあいか親子の事で何の心當りへあいか　庄「父に於ましては一向人の恨みを受るやうな事へでざいません　役「此の玉へまだ年も若いが何の怪しき男でも出入るやうな事へなかつたか　庄「平常の行ひから見ますると別に怪しむ者もでざいませんやうで誠に親切よ父の面倒を見て呉ました　が併し此道へ別段でどざいますから如何御座いましたか私しへ本宅にのゑ居りますから其邊までは心附ません下女共に御尋ね　下さいましたら其の邊は分りますでどざいませう　役「ウムコレ女前へ出ろさく「ハイ　役「名へ何といふさく「さくとヤ升　役「生れへ何處ださく「私しへ相州三浦岬で淫座い升　役「年齢は幾才ださく「二十三でどざい升　役「父はあるかさく「七年前よ死にましてどざい升　役「主人の妾玉といふ者よ密夫でもあるやうな樣子へなかつたかさく「密夫とは何でどざい升　役「隠し夫ださく「アー情夫でどざい升か然

んなものは決してありませんか玉さんは且那に惚て居るんで貴郎何でどざい升よ何處へ行くにも御一緒でありけれども出でなさらないンです　役「然んな事へどうでも宜い其方は亭主とか情夫とかいふ者があるだらうさく「御申戯ばつかりモー私しは男では鑑々しました散々馬鹿な思ひをした上句に手切金を取られまして今だに其の借金が殘つて居ります位ゐ……　役「アー宜し〳〵コレさんといふ女是へ出ろ其方何才よなるきん「十六で淫座い升　役「生國へきん「房州で　役「房州は何處だきん「安房國　役「房州へ安房國は知れて解らん奴だ土地へ何處だとヤすのぢやきん「平郡那古村の百姓では座い升　役「父は何とヤすきん「惣次とヤまして同胞十一人の中の私へ二番目でどざい升　役「貴樣には隠し男があらうきん「私しのやうなスベタに手を出す者はどざいません偶に出來まして男といふ者は游惰で私しが御主人から頂だきます御給金でも

何でも皆な取られて終ひますのらモー男ハ大狼ひでございヤ役「餘計な事をいふな無ければ無いで宜い両人とも心得居らうが平常出入の者ハ何ういふ者かさく「八百屋さんの安さんといふのは六十ばかりのヨボ〳〵のお爺さんで魚屋の房さんとれふ黒舟町から参りますのを豆腐屋さんに屑屋さん役「然んな者はどうでも宜い何か紛失物はないかさく「別に紛失物ハでございませんがアノおきさんどん内儀さんが且那よ拵らへて頂いた頭巾があいでハないかきん「然う〳〵アノお部屋の釘にぶら下つて居たのがないねへ吃度盗賊め逃る時に持て行たに違ひあいよ役「何がないとさく「左様でございヤ此間内儀さんが且那様よ拵らへて頂いた頭巾が伊座いません役「頭巾ハ何ださく「海鼠の縮緬で伊座い升役「外に何も紛らた物はないかさく「何にも心附ません是から悴庄吉が段々捡ためましたが何にしても持主は二人とも死んで居るから分り

ません乃で其の頭巾が一つの尋ね物となり役人ハ委細手帳へ認めて役「何しても氣の毒の事をした跡々を懇ろよ吊らふ、やうに万事よ心を配れと捡視の役人は伊歸りになりまして上役へ此段ヤ上る扨此方ハ正覺久しく小玉屋へ不沙汰をしたから往て見るとかヤ〳〵取込んで居る様子近所の者に聞て見ると且那が盗賊よ切られたとの事エーッといつたまゝ正覺は熊ろきの餘り尋ねもせず泣ながら家へ歸つて來て正「阿母さん大變だ〳〵りん「何だ大變とは何だエ正「何と人間の行末は知れないものだねへ小玉屋の且那様とお妾さんが盗賊よ殺されて今日お葬式だとサ私もお見送りをゝやうと思つたが心當りの事があるから阿母さんお前よ咄をするがトいふのは外でハないが一昨々日伯父さんが家に不相應の頭巾があるがどうゝたんだといふから阿母さんが小玉屋のお妾さんに貰つたといつたら宜い得意がある然ういふ家なら

若し近所に火事でもあつた時は正覺の親戚の者でござい升と駈附てやるのら家を敎へて置けといふから此々いふ所だといつた時に何時までも遊んで居られないから商法の資本は朋友の處より貸があるから取て來るがヒョッと今夜歸らなくつても心配するなどんつて出て往たさり今日で三日歸らないンだが那アいふ惡黨の伯父だから万一したら小玉屋さんへ忍び込んで金でも取らうとして且那樣が聲を揚たので切たンぢやアないかと思ふが然んな事でもあつた日はやァ私しやァ譯がないが事によつたら松井町の彌三郎さんといふ遊び人の處へ往やアしないかと思ふんだが阿母さん一ッ往て聞て來て呉れないのりん「眞正に然んな事だと大變だがアハ私しやァ往て見て來るからお前少しつるの姆をして居てお呉れとおりんは支度をして巾頭を冠つて松井町い彌三郎の處へ聞きに行きまたりん「ハ兎なさいまし〳〵奥で

丁度四五人の男が手慰さみをして居たが甲「誰の來たぜ乙「チー…誰郎でげすりん「私しは倉吉の親類の者でござい升が少々伺ひ度う存じ升乙「何ですェりん「四五日跡に倉吉が貴郎樣へ伺やァしませんでしたの乙「アト來た事ァ來たが途中で一杯飲んで勘定が足りないから三分貸して呉れといつて夫ッきり來ねへよお前さんは何かエ倉吉の親類かへりん「ハイ一寸した緣合の者でござい升少々急用がでざいまして尋ねて居りますが乙「ア！然うかへヒョッとしたら入江町の犬の糞の銀次といふ者の所へ行て聞て見なせェりん「有難う存じ升と入江町の此々いふ處と聞ておりんは是へ尋ねて行きりん「冷兎下さいまし犬の糞の銀次さんといふは此方で冷座いますか男「人を馬鹿よするな銀次なら銀次で宜いや犬の糞のだけ餘計ぢやァ無へのりん「夫は失禮を申上まをたッイ伺つて來た通ッ上まして……男「何か用かへりん「ハイアノ倉吉が此方へ

上れァ致しませんでしたか男「ウム倉吉かュ那んな不實の奴はありやァまねへ此間人の處へ錢を借りよ來やァがつて夫ッきり來やァがらねへ何處へ行てやァがるか松井町の彌三郎の處に居るのも知れねへ夫より外よ奴の行所はねへりん「ユー實は松井町の彌三郎さんの所で此方を伺つて參りましたので男「然うかへ夫ぢやァ何うも分らねへがヒョットしたら淺草阿部川町のドッコイ熊の處へ行て見なせエ此々いふ處だと教へて呉れたのらおりんは禮をいつて銀次の處を出て夫から阿部川町のドッコイ熊の處へ行て尋ねたが倉吉の居所が分りません（此のドッコイ熊といふは例のドッコイ〳〵といふお面へ糸を附て引く今は餘りありませんが以前は多くありましたが夫を家業よするのでドッコイ熊といふ謂れを聞けば有難くも何ともない男であり升）おりんハ那方此方を駈廻つてお腹が空て耐りませんから阿部川町の水月庵と

いふ蕎麥屋へ這入りますと男「被爲入いまし何を上升りん「お蕎麥ののけを下さい男「へィかけ一ばいと帳場格子の中よ蕎麥屋の親方が乾の苦を殘いているおりんはのけそばを二ッ食べてソコに立出てまたが跡で蕎麥屋の若い者が見ると頭巾が殘つて居りました男「ヤァ縮緬の頭巾がある亭主「ぢやァ今の內儀さんが忘れて往たんだらう此方へ出まねへ今よ取りに來るだろうと帳場格子に引掛て置くと隅の方に黃八丈のねんねこを着た客が花卷の何かで獨酌でグビリ〳〵飲みながら頻りに帳場の方を見て居たが客「モシ親方其の頭巾を一寸見せてお呉んなさいと受取て見ると薄鼠の縮緬で裏を引操返して見ると白繪子に鬪が書てある何思つたの懷ろから手帳を取出して調べると小玉屋庄左工門の隱宅で紛失した品で傷座い升扨此人は誰だと云と淺草阿部川町邊さつての御用聞の中で相應の宜、貌で三澤屋の敬次と云方でど

ざい升此の三澤屋といふ人が敬「親方是は些とお尋ねの品だ置て つた内儀さんが取りに來たら喜所の方から知らしてお呉れ家へ 往て待てるのら親「宜しう御座い升敬「ぢやア親方たのむよと敬次は ット歸つて終ふ入れ替つて息を切て戻つて來たおりん「モシ 玆に頭巾が御座いませんでしたか親「ハイ御座いました……ソレッ〳〵と亭主が若い衆よ目配せをすると直ぐ傍だから三澤屋へ斯 を知らせるが否や敬次は二三人の小分を連れて表へのら入り來て 今しも頭巾を持て出やうとするおりんよ向つて敬「モシ内儀さん 其の頭巾はお前の品かへりん「ハイ敬「此の品をお前何うして持て居 るのかりん「ハイ謝しな事をお聞なさいますね私の品を私が忘れ てッて取りよ來たのに不思議はありませんが敬「ウム夫やアお前 の品をお前が取りに來たのに彼是れいふ譯は無へけれども乃公 の方よ當りのある品だ不正品だから調べるッだ此間小玉屋庄左

工門の隱宅へ賊が道入た話ハ聞たか知らねへが主人と妾が殺さ れた其時此の品だけが紛失したと届けがあつたから夫で調べな ければならねへのだと聞ておりんは思はず叱驚りアーとつたと 思つたがりん「誠に濟ません御座いますか實ハ何でござい升小 玉屋さんへ悴の正覺が折々療治よ參りますが初めて上つた時私た しが手を引て參りました所寒からうから是を被つて行けとお妾 さんが下さいましたのでお座い升敬「妾とハお玉といふのかりん「 左樣でお座い升決して不正の品ではお座いません敬「然う聞けば 不正の品ではないやうだが併し當家の奉公人から紛失の届が出で 居るから不正でなくても不正と認めるから是から八丁堀のお 番屋まで來あせェ調べなければならねへりん「左樣ではお座いま せうが家に目の不自由な悴と乳呑子を置て參りましたゆゑどう ぞお勘辨を……敬「外の事なら勘辨のしやうもあるが此ういふ事は

勘弁が出來ねへ强情の事をいふと却つて不爲だから内儀さん往ねへりん「ハイと餘儀なくおりんに於ては屠所の羊の歩みの如く三澤屋敬次に引立られて八丁堀俗ゑ三四の番場といふへ來りまし た且那衆聞米樣が浮出になつて間「敬次りんといふ女は是か敬」左樣でござい升「間「面を上ろりん已は何處だりん「下谷山伏町家主喜兵衛店で浮座い升「間「貴樣の申立には小玉屋の妾ゑ頭巾を貰つたといふが紛失届ゑなつてるは訝しんな遣たものを奉公人の知らん譯がない罪のない者を罪に落すやうに紛失届をしたのでもなのらうがりん「夫には仔細が浮座いますト云ふのはお妾さんの仰しやいましたゑは奉公人ゑ知れると私し達にも呉さうなものだと思ふから内々でやると被仰つて下さいました夫ゆゑ浮奉公人衆へ知らずゑは届をしたものでは座いませう「間「ゆゑ然らば貰つたに相違ないといふなゑ「ハイ「間「貴樣の所に兄弟か親類の同

居人が居るかりん「ハイ「間「何だりん「弟でござい升「間「弟だ何といふ名前の者だゑん「倉吉とヤ升「間「其の倉吉といふは生國は佐原の者ぢやア無いのりん「左樣では座い升「間「國元で惡事をして江戸へ逃て來た凶狀持だなりん「ハイ「間「然うゐふ惡事をした者を仮令兄弟でも何故隱まつた小玉屋の隱宅へ忍び込んで両人を殺して立退いたのも倉吉の所爲と思ふ何しても此奴だけでは解らんのら悴を呼上ろと茲で正覺同道出頭致せと家主喜兵衛へ差紙が着く喜兵衛は何事のと早速正覺方へ參つて是々といふと「正「何ういふ譯かか知りませんが大變では座いますな喜「イヤ親孝行のお前だ何も心配するほどの事はなからう大方何かの引合だらうのら直に私と一緒に行つしやい「正「どうも阿母がつる坊を置てつたもんですあら捨て仕樣がないンですが是を何うしませう「喜「其子ゐ置て行く譯ゑないあら背負て行つたが宜らうと家主喜兵衛かつるを

背負せ正覺の手を引て八丁堀の浮番屋へ出頭致しましたかりんは正覺を見るよりもりん「エー陛かと摺り寄れば正「阿母さんのを正覺も母の手を取り正「マア何うして此ンな處へ……りん「其譯は此う〳〵と聞て正覺涙に暮れ背に負ひたる妹のつるを母に渡たして両手を仕き正「ハ役人樣にも上升故郷に於て惡事を働らき逃げ去つて參りました倉吉親類とはもながら一夜たりとも家へ置きましたは重々恐入りますがどうぞ御慈悲に免めの義は浮免しを願ひ升間「ウム正覺汝は評判の親孝行者我々も能く辨まへて居るが天下の法は曲られん賞べきは賞め罰すべきは罰するが上の掟疑ひの掛る以上は免す譯には相成らん小玉屋の妾已に死した上は死人に口なし全たく賞つた品の又た賊の入たる際紛失したものか相解らんによつて賊の手當よなるまで母りんに入牢ヤ附ねば相成らんのら左樣心得ろ正「エー併しながら母は母だけの

名前のあるばかり一戸の主人の名跡は此の正覺でございますから罪は私しに浮座い升ゆえどうぞ母は御免し下さい私しが入牢を致し升とん「コレ正覺お前は目の不自由な殊に稼ぎ人私はどうなつても案じる事はないどうぞ役人樣正覺を浮宥し下さいまし正「イエ阿母さんを宥してと親ハ子を思ひ子ハ又た親を思ふ親子の情合互よ涙よ暮けるを流石氣荒き役人も不便よ思ひ間「コレ〳〵可愛想ではあるが法であるのら二人の中何れか入牢をさせねばならん正覺貴樣は主人であれば據ろない併し盲人の事だから能く手當をして遣はすやうに取なしてやるぞ家主喜兵衛りんダハ正覺を送らんければならんのら左樣心得ろ……親子手に手を取て暫らく泣伏して居りましたがりんは家主へ引渡され娘のつるを背負て泣々家へ歸り正覺は入牢に相成ました乃でかりんは八百善と玉川檢校の所へ參つて斯樣〳〵と話をすると何れ

も驚ろく事大方ならず地獄の沙汰は金次第其の向々へ手當をして少しも樂の出來るやうと牢内の者へ内々手當をいたしたから乃で正覺は親孝行の者なれば能く勞つてやれといふ上から壁が掛つたゆゑ外の罪人とは違ひます然る所拔に下谷組の盲人一同是を聞て氣の毒に思ひ正覺に於てハ必らず罪を犯すべき人物ではないに依て假令入牢よなるとも一時の掛り合で身の汚れた者でないから我々は同業の好みを以て上へ嘆願に及び正覺を下げて貰をうちやアないかと一同相談の上腰弁當で小田切土佐守殿へ嘆願に及ぶと夫よ續いて淺草日本橋神田芝麻布小石川赤坂麹町等の盲人組合からも皆親孝行の正覺冷免の儀を嘆願に及びまするをば役人衆種々に理解致すと雖ども所謂盲目滅法界といふ位の者で始末よ往ません何と說諭しても毎日〳〵斯の通り去なから百姓一揆の門訴の如くさればとて之を召捕て禁獄をも

附る罪でもない親孝行の者を助けたいといふ熱心から願ふのであるから小田切土佐守も其の所置よ苦しみ坂部能登守へ相談よ及びたるに盲人なり親孝行者なり當人の犯罪ならぬ事も相解り居る所謂掛り合であつて見れば侍の情を以て師匠玉川撿校へ預け營業の義ハ差捕ハんと申附たが宜らうと差圖小田切殿の早速玉川撿校を呼出して正覺事一同の嘆願により親孝行の廉も有之に付格別の慈悲を以て倉吉召捕まで其方へ確と預ける去りながら營業の義に於てハ差構はんに依て其方よ預りの一札を入れろといふ事玉川撿校喜んで預り証を差入て正覺を引連れ立歸りました正覺に於てハ直樣八百善を初め諸所心配を致し呉れたる人々の所へ一々禮に歩行くつもりだが中々數が多いので廻ることをいたし是ません依て其の組々の頭立たる人の處だけへ禮廻ることをいたしより一層親孝行の名が世間へひろまりました「孝行は實にも高峯

の花なれや見上られたり人もほめたり『忠臣は孝子の門より出づ』と實に孝行の徳は大なるものであと升

第四席

扨正覺下渡じの義を嘆願に及んだる盲人共は聞届になつたるを最初は小田切殿の計らひと思ひ居たるよ段々聞けば南町奉行坂部能登守の差圖と知り我々の願ひを容れて正覺を助けて呉れたのは坂部様だから何でうぞして恩返しをしなければならんが盲目の事で是といつて出來もしないから火事でもあつたら第一番に大勢揃つて浮見舞に行うぢやアないかと妙な事を牒し合せて置たスルト或る烈風の日丸の内より出火が浮座いまたからソレ坂部様のお屋敷が近火だ乘ての約束馳附ろと下谷組合の盲人共年の若い力のある奴が四五十人集まつて杖をふり〳〵めくら滅法界より何が來やうが一切構はずワアワッと聲を上げて廣小路から

操出して數寄屋橋御門内へ乘込んで參りました丸の内は諸方の火消を初め夫々見舞の連中夥だしく其の混雜いふばかりせん然るに右盲人の一隊操込んで來たから「ヤア何だ按摩が大變よ來たぞめくらの火事見舞たア變だサア〳〵危險〳〵」按摩ア退いた〳〵といへど一向聞かん笠棒めへ盲目だつて目明より役に立つといふ風をしてドン〳〵能登守屋敷の表門裏門通用門の差別なく乘込んで按摩ア騒ヤしう浮座い升浮近火の浮見舞でござい升下谷盲人組合一同罷り出ました私し共組合親孝行の正覺御殿様のは差圖よて浮下げくだされ有難く心得ました御礼申上げ御近火の折柄なぞは御大切の品の一ッも持出だし御恩の萬分の一を報ひヤさんの心底よて斯く打揃つて御見舞に罷出でましたと此の殊勝なる志しを聞て坂部殿感心あつて親孝行の正覺を出牢させたを喜んで禮の爲に火事見舞に來たといふは感服の者ぢや折角

の志を無下にするは不便なれど併し盲人の事なれば大切の品を渡して紛失致しても相成らんから大切の物だと云て月濟の帳面類を箱詰に致し封印を附け遠々の所早速走せ附け呉れて辱けない其方共の志しを奉行へ申通じたる處殊勝の段感服あつて天下の地錄大切の書類を守護するものは外にない其方共よ確と預けるに依て疎勿無之やう守護いたし呉れとれつて渡せとの仰せ直様右の如く帳面類を封入したる箱をば持出して奉行より云々の仰せであるといつて渡したから一同喜び勇んで天下の地錄大切なる書類を守護するは我々盲人より外にないぞうだ目明恐れ入たかと無暗に威張り散して五性大事よ其箱をば擔ぎ出しまし た一日置て取締矢島檢校を呼出し下谷盲人組合の者一昨日丸の内近火の節當奉行所へ罷越したる段殊勝千万よ存ずる然ども非常の場所へ盲人等立入るは他の妨害にもなり危隱の恐れあるを

以て爾後如何なる大火と雖も馳附る事は相成らん一昨日出張の義は厚く賞し右褒美として公儀より青差五貫文を下さる一同へ之を配當して遣へせといふ仰せ矢島檢校有難く御禮ヲ上て五貫文の錢を頂戴して引下り一同へ斯々と申述に及んだから盲人一同坂部殿を敬する事神の如く併し五貫文の錢を一同へ配當致した處一人前幾らにも當りませんから盲人一般辨才天を信仰する事に付て種々辨才天の利益を受て居るよ依て右の金子ハ尙一統の幸福を祈らん爲め音樂を奏して辨才天の祭禮をする事よ決着し茲で檢校は幾ら座頭ハ幾ら匂頭ハ幾ら市名ハ幾らと夫々身分に應じて出金を致し右五貫文を其中へ入れて諸方の辨天へ奉納致て夫々祭りを致しました此も畢竟正覺が孝行から起りました事で涉盧い升されば正覺は親孝行の名愈よ高くなり悉々く社會の人望を得ました錢るに母のおりんは八百善方へ度々參ります中

に或る一日用事があつて參りました時は料理番の勝吉といふ誠に腕前の宜い八百善一等の男八百善で一等といへば江戸で一番江戸で一番なれば日本で一番といつて宜い位の者で善「勝さんお畏りんが來たがどうの甘へものを拵へて畫飯を出して貰ひたい勝「とまりました別に親方が甘へものと云へないでも私しが腕によりを掛て客人に出すより甘へものを拵らへて出します善「勝さん夫は往ない幾らおりんが、何でも客人に出すより甘くといふと客人はまずいものを食べさせるやうで往ねへ客人はへどこまでも甘いものを食せなければ八百善の暖簾に拘はるのら氣を附て呉れ勝「ナニ夫ア串戯ですと勝吉が心を籠めた料理でおりんは畫食を馳走はなつて歸つた跡幸ひ客も途切れた樣子善「勝さんお茶が入つた菓子でもお喰へ勝「有難う存升善「時にお前に少し話がある外の事でハない乃公ハ此間からおりんが來る度にお前の素を

振を見るよお前何だねおりんに餘ッ程惚座つてるお勝「イヱ何う致しまして善「イヤ隱しなさんな此道ばかりは人間の情で有るべき事だ決して羞るよハ及ばねへ此うといふお前の方は心持があるなら咄なさい勝「ヘヱぢやアマア笑つちやア往けません實は私はアッコン惚込んでるんで善「年もお前よりは三ッ四ッ上だが何ういふ目的があつて惚た勝「ナニ年が何う此うの女ぶりが宜いからぢやアあります善「デモ百姓の女房に何うし惚れたのといふ譯てなア勝「夫ア且那百姓の女房は違ひないけれども百姓の女房にしてハ理屈も分つてるし手も一寸書くし第一子供を那アやつて優しくするし浮世話になつてるとは云ひながら此方へ出る度禮義正しく夫にヤ、ア言葉數はアンで聞あず針仕事は充分は出來噪ァに持つのハ那アいふのが何より樂しみだと思ひ升マアお咄が出たのらヤ升が如何でございませう且那一ッ私しも此方のお世

話になつて長年此うやつて獨りで居りますがどうかおとんさんを私しの女房に貰つて頂きたいんですが何ういふものでお座いませう善「お前が夫はどよ思つてるならば當人を呼で一ッ話をして見やうといふので八百善の主人がおりんを呼で段々右の話をすると りん「固より私しゝ良夫よ操を立やうと思つて居りますからどうア其事ばかりは……善「イヤ女は然うなければならない譯だが併しお前も子供を二人まで持て中々獨りで世帶を張て行き通せるものでもなく家を繼げる爲に二度添の亭主を持たからッて女の道を破つたといふではない私しの家でも評判の宜い勝吉に今出られでもしてゝ不都合だから成べく處よ入たやうよして長く置たいと思ふのだからお前も私しの家を思つて呉れるあら一ッ私しの願みを聞て勝吉の女房よなつてゝ呉まいのと云はれ夫では内へ歸つて正覺に相談をすると 正「阿母さん夫ゝお前さんまだ

老朽たではなし私も妹もあり獨りで居るンでないから且那のお言葉に從つて然うなつた方が宜らうといふので茲に至つて話が纏り愈よ八百善さんが媒妁役で四海波風穏やかに目出度祝言の盃も濟み花川戸へ一寸した家を借りて右の勝吉ゝ通勤をいたす事になりました先づ小一年の間別段のお話ゝなく夫婦仲も誠に睦まじく一家和合して居りましたが丁度正月七草の晩充分飲べ酔た樣子で機嫌よく立歸つて來た勝吉「サー今歸つたりん「ヲヤ大層宜い機嫌で 勝「今日は且那の御供をして年始廻り滅法界酔たが併しあがら人の奢りで飲ちァ氣が詰つて味くねへものだが家でのお酌で一杯飲むなァ又た格別だ面倒だらうがおりんさん一本つけてお呉んなさいなりん「何だねへァ然んなに酔て居て餘り飲だら毒だらうが……勝「馬鹿を云ひねへ毒よなるほど飲やァしねへ那ッばかりの酒に酔ふやうな勝吉さんぢやァ無へンだと

醉た者が醉ないをいふが酒飲の常亭主の機嫌を損じないやうに飲して居る中に段々醉が廻つて參りましたかりんは餘り飲み過て身体を障ると思ふからりん「モー此位にして置たが宜う淆座んせう又た明日の勤めもあるものだから勝「ウム乃公が飲過て身体でも惡くなつては勤めも出來ず活斗にも差支へると心配するは夫婦の情で嬉しいがナニ然んなに案じなさんな春早々延期でも無へ事を云ふやうだが万一どんな事があつても殘つた者の路途に迷ふやうな事ハ無へ乃公は此ゾな身分でも此う見ても田舎へ行けば田地の一反や二反は持てる贅澤は出來ねへが何うか此うか其日を送るだけの事は出來る身分だから心配しねへが宜いりん「ちやアお前さんは江戸ぢやアないのかへ勝「ウム田舎者よりん「然うかへ私しやア江戸の人とばつかり思つて居たが田舎

ハ何處だへ勝「上總よりん「ヘエー上總ニ勝「上總ハ東金の田中村といふ處だりん「エッとかりんは驚ろいたのは先夫金左衛門の故郷であるますからりん「田中村のお前さん何といふ處から出たんだニ勝「乃公の兄きハ田中村の名主で傳右衛門といつて乃公が餓鬼の時の名は常松といつて幼さい時よ江戸へ出て出前持から辛抱して一疋立の料理番よなつて今ぢやア勝吉で旅から旅を渡つて歩行き日本一との親方とか仲間の者にも持囃され飯を食ふにも上座へ座るやうになつたが人間ハ老少不定何日何時どんな事があるめへ者でも無へけれども仮令ば何んな事で身体が惡くなつても兄貴の方から些とや少との仕送りはして呉るから決して心配しねへが宜いのらマア機嫌よく酔をして呉れと聞て叱驚致したのハかりんでハ座い升現在連添ふ亭主の兄は先夫の敵と知るからよハッと太胸を突ましたが斯とは知らず勝吉は滿醉なして

寐所の中へ轉び込み前後も知らず寐込んで終つた跡よおりんは行燈の灯を掻立て勝吉の枕邊へドッカと座し熟々と顏を打眺めてりん「アー知らぬとは云ひながらお前さんが傳右工門の舍弟と云はれて見れば どうも私は生涯連れ添ふ譯よ往きませんトいふは現在お前が肉緣の兄の爲よ先の夫金左工門は冤の罪に掛り獄門といふ淺間敷お所刑を受けて相果た其の舍弟に身を任せ一生暮す事は出來ぬよ依て私は此儘別れるゆえ一旦結んだ親子の緣をうゞ正覺だけは行末の面倒を見て下さい私はおつるを連て此の世を去り冥土に居る良夫に詫言をしなければ成りませんどうぞ今までは夢と諦め勘忍をして下さいモシ勝さん必らず惡く思つて下さるなと流石夫婦の情愛でおりんハ暫し涙に暮て居りましたが斯て書置の一通を認ためて勝吉の枕許に置き今一通は次の間に寐て居るおつるをば背負まして泣々花川戸の住ひを立出でましたは死ぬ覺悟と見にました此方は何よも知らぬ勝吉は翌朝にあつて目を覺して居るとおりんが居ない何處へ行たのと那方此方尋ねて居る中よ氣が附たのは枕許の書置取る手遲しと披いて見ると何か知らざれども お前と夫婦になつて居られぬ譯あれば是までの緣と諦めて永の暇を下さいまし去りながら一旦結んだ親子の緣正覺だけは我が子と思ひ行末を頼むといふ書置であつ升之を見て勝吉は呆れるばかりよ驚ろき暫らく腕を組んで考へて居たが何思ひけん次の間よ寐て居る正覺に勝「起ろ〳〵正覺正」ゆう早う御座い升勝「お早うぢやァ無へサァ汝を家へ置く事は出來ねへのら出て行て呉れと寐耳よ水では座いますのら驚ろいた正覺「お腹の立つ事がありますならお詫を致し升阿母は起ましたの勝「其の阿母の事よ就て汝を家へ置く事が出來ねへどうも平常の

素振が訝しんを思つたが扨は愈々出來合て居た情夫を手よ手を取て逐電をしたに違ひない正「夫ア阿父さん浮心得違ひ阿母に限つては然んな淫猥な事はありません勝「生粋な事をいふな汝たちに然んな事が分るか夫ともないと汝が受合ふあら阿母を尋ねて來い正「ヘエ尋ねて來升一寸顏を洗つて……勝「顏なぞを洗ふには及ばねへサッサと行けと追ひ立られて正覺は涙ながらに杖を取て表へ出でましたがアー如何なる仔細か知らないが阿母よ限つて然ういふ不都合の事をする者でないがヒョットして先に居た山伏町の方へでも行はしまいかと山伏町の家主を尋ねて見たが居た樣子もないといふ事那方此方をマゴ〳〵歩行て居る中に腹の空て來るし仕方がないから是から八百善の且那の處へ行て相談をしやうと泣々杖に縋つてヒョロ〳〵とやつて來たのハ丁度八ッといふ刻限只今の二時過で座い升ハ密ハ太田備中守殿の下屋敷通用門の所へガラ〳〵下りよ下りて來る途端よ向ふからパ

ラ〳〵ドーンと突當つた一人の男「何をしやアがる氣を附ろ正「ナニ盲目に突當つて置やアがつて其方で氣を附ろ男「何をいやアがる此の盲目め正「ヤア其聲よ覺にがあるお前は伯父の倉吉だな男「ウム汝は正覺の拔で遇つたが百年目覺期をしろと胸倉を取て懷中物を拔た樣子渡してはならんと正覺は「往來のお方來て下さいまし盜賊では座い升大惡人の倉吉で座い升ぞうか助けて下さいといふ酷い奴ハ倉吉已れの爲よ現在甥の正覺は入牢まで にもなつてるを知るや知らずや又茲て懷中物を引攫つて逃んとする實に畜生よも劣つた奴では座い升時に折よくも北の奉行小田切土佐守組同心定廻大里忠右工門鉄砲洲舟松町ハ用聞糀屋彌吉ハラ〳〵走せ來て浮用だと岡人前後より飛掛るをエイと倉吉が指を以て彌吉の目を健たかよ突たからアッといつて彌

吉が二足三足跡退るを此野郎と思ひ用だと忠右工門が打込んだ十手を避けて横腹をドンと突たから何ぞ耐らんウンといつて倒れました彌吉が又後ろから組付く奴を廻か向ふへ背負投して起上る間にバラ〳〵ッと逃げ出だた備中守下屋敷の藪の中へ逃込ましたが如何よ探索をすると雖ども終よ其行衛を失ひましたの残念の事で浮座い升依て正覺をば一旦番屋へ連れ行き取糺すと懐中物を奪はれたといふ事段々の手當を受て正覺の母は知れず財布は取られ家へ何といつて歸らうかと思案をしながら花川戸の家へ歸つて來て見ると豊國らんや正覺の出た跡で勝吉は道具屋を連れて來て諸道具を賣拂つて何所かへ行て終つたといふ近所の人の咄し據ろなく八百善へ參つて勝吉が來たか何うだか尋ねるとまだ今日は來ないといふよ主人に面會して實の是々此々でさい升と逐一の話をすると主人に於ても不思議よ思つてお

前の阿母に限つて虫が附くやうな女でないが何あ是よは仔細があらうから先づ兎も角も家に居るが宜いと正覺を慰さめて家へ置きましたが元々玉川撿校の方へ話をするとまだ杉山眞傳流の針も半ばよして悉皆出來たといふ譯でもないから針治を教へてやるのら正覺を遣して呉れといふので正覺は玉川撿校方へ參つて頻りに針の稽古をして居り此の玉川撿校といふ人は針治幷に金貸をば營業にして居り升茲よ藤兵衛といふ手代があり乎して諸方の借方を督責をして歩行く役で或る一日藤兵衛駒込片町の米屋に十両の貸があつて催促に行た處主人い相州浦賀の方へ用足しに行たといつて女房が鵜鍋か何かで一杯馳走をして休よく言譯をいつたので酒一杯でも馳走よなつて見れば酷く催促も出來ず宜い心持よ酔てブラ〳〵と神樂坂まで来つて來ると頻りに大便が催はして成らんの

ら通り掛りの紙雪隠へ道入して用を足しながら中へ張附た板倉一龍斎瑞一切根きりの廣告を讀だり誰が書いたか尻の穴曲りし人い是非もなし直なる者は中へ垂れべしなどゝいふ樂書を讀あがら不圖仰向て見ると屋根裏よ小倉の關東縞の古びたる紙入のやうなものが挾んであり升ハ、ア此つは稼ぎをする奴が出した空を拾て慌たものと見にる雪隠へ投り込まないで屋根裏へさして行く奴は盗賊でも冥利を知た奴と見ねるとどうで金貸し手代だけよ慾張てる奴で夫を取つて見ると針だとうの中よ銀針が道入つて居る外に手紙が一本あり升上書を見ると正覺どの母りんとしてあるハテ正覺……聞たやうな名だ……ウム正覺たア聞たやうな處ではない一ッ鍋の物を食ひ合てる家の正覺だ兼々阿母が家へ出して知れねへ〳〵といつて泣て居たが其の書置だなヤレ〳〵持て行て讀でやらうと之を懷ろにし

て立ち出でました藤「只今歸りました」「アー藤兵衛大きに苦勞だつた米屋ぢやア何といつた……アー奥エ何だな酒を飲で來たなアー奥エ途中で飲で來たと然うぢやアあるめへ馳走にあつて來たんだらう困るなア催促に行て馳走よなつたら取る譯の者ぢやアない藤「イエ馳走になつた譯ぢやアございませんが時分時ですからといつて忌だといふのを無理那理よ私しの口へせうでを宛て……檢「馬鹿をいへせうで酒を呑せる奴があるものか」藤「實ハその主人が相州浦賀へ金策よ參りましたから歸り次第必らず返金をするといふ事で種々談じましたが家内ばかりでどうも致し方がございませんでモー明後日あたりは歸りませうからどうぞ勘弁下さいまし」檢「然ういふ譯なれば仕方がない以後決して催促よ行に馳走になつては成らんよ」藤「ヘエ愛こまりました」と直よ次の間へ來て藤「正覺さん正「聞て居ましたよ叱られましたね」藤「イ

ヤ正覺さん夫に就て此う〳〵いふ譯で紙入を拾つて來たよ「エーッと正覺ハ目が見ないから感の宜い者でございますから頻りに紙入をさぐつて居りましたが正「アー是々どうも有難う存じ升夫ぢやァ何でございますか中に金は澤山なかつたが針がはいつて居たのを引拔つて行やァがつて……藤「其中に手紙の樣なものが這入て居るよ正「ヘエ然うですの藤「ソレ是だ正覺どのへ母りんが正「エー夫ぢやァ阿母の手紙でゐ座いますねアー此ういふ時に目の見ないのハ殘念でございますが番頭さん何と書てありますの一寸讀んで聞のして下さいましな藤「アー宜しい氣を靜めて乃公の讀むのを聞ねへよ正覺ハ耳を立て聞て居りましたが前ヲ上た勝吉への書置と同樣勝吉さんを眞の親と思ひ能く孝行を盡せといふ事が書てあり升正「エー夫ぢやァ阿母は身でも投て死んだ樣子ですな藤「マァ此の手紙の樣子ぢやァ入水でもした

かと思ふが併し然んな間違ひハあるめへよアー危ねへ〳〵正さんお前何處へ行く正「エー情ない事ゝなりました妹のつるを連れて死んで終つたに相違ありません阿母は心配とは云ひながら老先長い妹のつるが不便でございます升死ぬと覺悟をしたならば此ういふ譯で勝吉と一緒ゝなつてる事ハ出來ないと一言の話位もして貰れても宜いものをエー事ぞ私も死んで跡から逐附ます「マ〳〵然んな事をいハないで時節を待つが宜い死んだか生たか知れないものを早まつた事をまて万一生て居た時ハ却つてお前が阿母に泣をあけるといふもの決して心得違ひをしなさんな八百善といふ且那も附て居れば家の師匠さんも心配をして居るからと種々に慰さめたが其の翌日不斗勝手口から出た正覺向島の堤をさして急つたは死ぬ覺悟と見まして涙と共に杖を力に辿り〳〵來た隅田堤ポンと石に躓づいて前鼻緒が切れる逐端杖を

那方へ投げやりてパタリ夫よ倒ましたアー一ッくるへば何のら何ぞで此の通り死よ來たとハ云ひながら前鼻緒の切れるといふも又た不思儀去りなから如何なれば我々親子は斯くは薄命なる事かと獨ま言云て手さぐりに杖をたづねて居る折柄女「モシ按摩さん鼻緒が切れたやうだね正「ヘエ雖郎でゐ座いますか女「私ハ茶見世の女だが切れがあるあら鼻緒をすげて上るゆゑ一寸見世まで御出で正「有難うゐ座い升ゐ兎下さい女「サア此所へお掛け正「ヘエゐ親切様に有難うゐ座い升と正覺ハ樣台へ腰打掛る其の傍へに居りましたは年の頃二十七八商人風の一人の男髮り胡麻柄の唐綿の着物ま博多の帶をぐめ羽織をたゝんで肩に掛け粹な煙草入を腰ま提げ雪駄穿まて茶を呑みながら男「チイ姉さん此所ハ何が名物だエ女「左樣でございい升櫻餅が向島の名物でゐ座い升男「夫から蒟蒻が名物ぢやア無へか女「イーエ且那蒟蒻ハ中間ぢやアご

ざいませんの男「ナアニ隅田の蒟蒻(酢だの蒟蒻)といふぢやア無への女「ヲホ、貴郎お面白い事を仰しやいます男「時ま マア乃公も家でも持つやうなら向島へ持うと思ふ春は花夏は涼み秋は月冬は雪と四季の樂しみがあらな女「且那然う仰しやいますが中々住んで見れば宜くはゐ座いません間て極樂見て地獄といふのは此の邊で隨分時々は忌になる事がゐ座い升夏にあると蚊に責られるばかりでなく夜が更けて寂々と淋しくなつた時分ドブン〳〵と水ま飛込む音がするのですよ男「夫ア何だエ女「身を投る者があります男「フーム然んなま身投があるか女「あるんですよ年にお前さんぢんな事をしても七ッや八ッは乾度ゐ座い升男「然うかなア世間には命を疎末まする奴が隨分あるものだなア女「此間も縞縮の宜いねんねこを子供に着せて夜露に當らないやうま櫻の樹の下へ捨子をして臺廣の東下駄を脱捨て飛込だ者がゐ座いまし

たが其子は御武家様が拾つてお出でになつたさうですが可愛い子供を跡に遺して身を投るといふのはよく〳〵の事で淫座いませう「私は見ませんが大層良い子だッたさうで淫座い升と聞て居ました正覺が何思ひけん立上つてヤラ〳〵と馳出し己にドンブと飛込んとする處を男「ヤア危ねへ何で身を投るんだ」正「ユー助けると思つて見逃まて下さいまし」男「馬鹿な事をいひなさんな助けると思つて死ぬを見て居る奴があるかあぶねへよ」正「どうゲ其處を放して下さいまし」男「どうして是が放せるものかヤア按摩さん何ういふ譯か知らねへが氣を落附てトックリと話をして聞せなせエ」女「かンよマア按摩さん目も見ないで其ッな所へ飛出してあぶないぢやアありませんかヤア〳〵此方へ來て能うく且那樣へお話をしたが宜いと右左りより手を取られ正「有難う存じ升情ない事になりまして何うしても生てる氣ゐに座いませんと

いふ譯は今姉さんのお咄に子供を道して身を投た女があるといふお話其子供といふは私しの妹つるとヤすもの又た身を投げたは母のおりんといふもので淫座い升實ハ昨日初めて知りましたが紙入の中ゑ書置が這入つて居りました世の中ゑ私し位め不憐倖の者は淫座いませんどうぞ淫察し下さいましと男泣に泣沈んで消にも入るべき有樣ゑ右の男も涙を浮め男「夫ァマア可愛想な咄しだが全体お前の家は何所だエ」正「私しは梅窓院の地内に居ります玉川撿校の弟子の正覺といふ者で淫座い升」男「ウム夫ぢやアお親孝行の評判の高エ正覺さんたアお前かへマア最う一足遲いとドンブリやつて終つた處あぶねへ事であつた私は藏前の坂倉屋といふ札差の番頭角太郎といふ者だが牛の御前の横丁まで今寺參りゑ行た歸り掛け此所ゑ休息をして居たが宜い處で遇つたヤア悪いやうゑはエないから俺と一緒に其邊へ行て飯でも食ひな

から種々話も聞うから不了簡を出さないが宜いチー姉さん女「真正で浮座い升浮寺詣りのお歸りに宜い事をなさいました人一人り助けるのはどの位の御奇特の知れませんチー按摩さん折角浮親切樣に仰しやつて下さるもの且那樣の浮供をして行て能く〳〵お咄をして悪い了簡を出さないが宜いよ」正「有難う存じ升と右の角太郎よ連られて植半へ參り奥の二階で浮飯を食べてトクリと意見角「兎も角私と一緒に來なさい私の主人は情深い人だから遇て慰て出て入をしたが宜い必らず悪い事へないからと云へれて正覺も漸やく死を留まつて坂倉屋の家へ同道致し段々と番頭角太郎が話をするよ主人も衆て聞て居る親孝行の評判者の夫は不便の者と種々親切に異見を加へ是より坂倉屋方へ出入をする事になりました或日此の坂倉屋の主人が正覺よ向つて主「お前へ杉山眞傳流の針へ玉川檢校の弟子で出來て居るが上の浮典

醫で三番町の桂川先生といふへ日本一の杉山流の鍼治科である のら師匠と相談をして此の先生の秘術を受け其の得意〳〵の極意を受たらば必らず立涙の先生になるだらうと思ふがどうだエ一ッ桂川先生に極意を授けて貰つたら何ういふものだらう」正「有難う存じ升早速立歸つて師匠に話を致しませうと其の日立歸つて玉川檢校よ右の話を致すと玉川檢校も大ひに喜び「玉「夫は何よりの事兼て評判の桂川だあらお目に掛つた事はないが然ういふ事ならば半年でも一年でも修業をしたが宜いと快よく免して呉ましたのだから乃で坂倉屋の世話で桂川先生の許よ來つて半年といふもの一心に修業を致しました處元出來る技で其の道の業を致したのだから年は若いが適ばれの腕前となり如何なる難病でも一鍼を下して平癒を致すといふ位ゐよ相成りました技で坂倉屋が八百善と相談の上玉川檢校と協議を遂げて行〳〵はどうの正覺に

然るべき妻を持たせ願へくは官職でも授けてやらうといふので浅草の中田甫といふ處よ一寸した家の賣物がありましたのを求めてやつて下女一人を附けて一軒の世帶を彼の正覺に持たせましたから先づ正覺も一軒の主人となつて一層其の業を勵むやうよ相成りました

第五席

或る一日坂倉屋の番頭角太郎が來て角「今年は巳の年で六十年目では開帳があるが若且那の道之助さんが己の年だからどうか賑やかに參詣をまたいといふのでお日頃出入の人達を連て行うといふのだがどうかお前さんも一ッ一緒よ行て貰ひたいといふ若且那の言傳だが何うでせうといふゆえ正「私しのやうな盲目がお供としては却つて皆様の迷惑よなるませうから御免を蒙りたいもので角「イヤお前さへ差し支へのない事なれば此方では是非行て

貰ひたいのだといふによつて夫でハと當日は打揃つて江の島へ赴き藤岐屋といふ料理屋へ上り酒宴を開いて一同大陽氣の遊びを致して居る中に櫻川喜遊といふ幇間至つて女好の男だが此の家の娘お幸といふ今年十八よなる標致好しに早くも目を附け手を取たり膝を突たり戯むれるを悪な奴と思ふが商賣柄では座いまして冒く口先であやなして居るのを喜遊ハ一切夢中となつて視の影へお幸を招ぎ何う談判を開いたのお幸も今はノッピキならぬ場合となり幸「私のやうなものでも夫はどよ思つて下さるは有難う存じますゆえ夫では今宵私の寐間へ忍んで來て下さいと嬉しい返事ヲーぱたりと喜遊は喜び夜の更るを待て居る中一同も酔ひ勞れてグッスリと寐込んで終い間毎〳〵に聞へるは幇の聲ばかり喜遊は最早時分ハよしとソッと寐所を忍び出で音のせぬやう千鳥足をふみながら階子段を下りて行き廊前の次の座敷

の四壁牢の間に寐て居ると聞たから拔あらんと思ふのらッと障子を開て這入れば灯火ハ消へて眞暗だ此頃の娘子供ハ如才ない人影でも表へさして外の者に見られてハ面倒といふ所から灯火を消して置たものかあるとも初戀の羞のしんかと莞爾〳〵しながらさぐりよれば手に當つたは布團の蹠心得たりと其儘ヨ裾の方からもぐり込むとイヤどうも臭いの臭くあいのと鼻持もならぬ忌な臭ひ　喜「チー臭ェ……男「ア痛てエー〳〵〳〵誰だか知らねへが乃公の腫物の皮を剝て終つた誰か來て臭れェと大きな溜聲を出されて叱鷲ア喜造は何か何やら一向解らず周章狼狽其所を逃去つたが其の壁に驚ろいて目を覺した家内の者盜賊でハないかと大騒ぎ二階に寐て居た道之助は早くも聞附け起出でヽ那方此方を見廻せば都間の喜遊が寐所の中ハもぬけの殻扨ハ喜遊め先刻頻りにお幸さんヨ掛合を附て居たが又た例の夜這星か困つたも

のだといふ中妙な姿をして喜遊が夫へ逃込んで來たから段々糺せば實ハ是々此々と前の始末を白狀し　喜「誠にどうも相濟ません道「どうもお前の女嗜には困り切る宜い加減にえたが宜いといふ處へ參つたのは當家の主人　主「エー且那樣どうも夜中騒がせて相濟ません　道「イヤ飛だ事此の喜遊夜る男が女嗜でヤアお幸さんの所へカン〳〵ノウを極込んだンで　喜「どうも済主人相濟ませんどうかは勘弁を下さいまし併し恐ろしい臭いお幸さんでしたよ　主「アハヽヽ夫ハどうもお氣の毒樣實ハ那れに寐て居りましたのは病人で病人も只の病人と違つて天刑病といふほどでも座いませんが夫に似た病ひでハ座いましてな　喜「エーッ　主「アノ男ハ料理番で座いましてオッを前に私し共へ來て居りましたが暫らく見になのつた所江戸へ往て八百善さんの料理番ヨなり日本一と云はれるやうになつたが今度少し仔細あつて暇を取て

來ましたから此方のほど厄介よりたいと申ますゆゑ私し共でも八百善さんで便つた位の職人を使ふのは名譽で御座いますのら其儘家へ置きましたが一月ばかり跡でございい升不斗顔よ種物が出來ましたのが段々膨れて來て忽ちの間にひどい姿よなつて終ひまえてモー昨今は身体も利かず女どもゝ藥を煎じてやるのさへ忌がつて碌々世話もしてやとませんで眞逆然ういふ病人よ出て往て呉れと云ふ譯よも參りませんゆゑ私しども夫婦も萬事世話をしてやつて居り升「ヲヤ〳〵夫ぢやアお幸さんよスッカリ釣られて終つた道理で奥いと思つたら其の病人であつたかと喜遊ん膳を潰して居る傍よクスリ〳〵笑ひながら咄を聞て居た正覺何思つたか前の方へ進み寄り正「ヱ主人よ伺ひますが其の料理番の名前は勝吉と申ますか主「ヘエ勝吉と申升正「ヤア夫でハ若且那其の勝吉といふのハ家てお咄を致しまたた私しの義理ある親父

でございまして私を振捨て江戸を立退いた人でゞ座い升他人様ですら病氣になつたのを見棄て世話をなさるのに如何に先方が不人情に出ましても一旦親子となつた者ゆゑ私しハ人間の道を守り引取て參つて療治もさせ傍よ居て世話が致したうでございい升ゆゑ私しハ先へゞ暇を頂いて參りますと聞て一同涙を流して感心し仮令一旦親子の縁を結んだとは云へ捨られた者を夫ほどまでに思ふとんふは得難い志ざし然ういふ譯ならお前達二人の駕籠を拵らへてやるのら先へ歸つて能く療治をさせたが宜いと其の翌日右の勝吉よ正覺は對面し前非を悔ひて面目なげよ頭も上らぬ勝吉を種々よなだめて万事道之助の世話にて駕籠に乘て江戸淺草田甫の正覺の家へ立歸り是より神佛に信心を致し又たは其道の醫者に掛け親切よ介抱を致して居る中に其の甲斐あつて段々と少しつゝ快氣よ赴きましたから勝吉も一方ならず喜ん

で居ると正覺の評判は益々宜しく此頃は又芳原等にて大分得意が出來ました中にも江戸町の丁子屋清右工門といふ其頃はひの大見世で此家へ度々療治に參りますが今日も例の通り内所の部屋で頻りに療治をして居ると丁山といふ花魁の客が沙酒を飲んで居て俄かにウンといつて顚倒返つて終つたから居合したる者大騒ぎ水よ藥よといふ中へ幸ひ正覺先生が居なさるからお賴みやさうと夫へ連て來ると是は癪の烈いのだといつて懷ろから金針二三本取出し下しました處忽ち開きが附ました癪といふ病氣は妙な者で一時に起つて來るのと思ふと開きが附けばケロッと癒りますと嘘快い心持だ醫かも藥でも飲して呉たか嘸皆んな驚ろいたらうが是が持病で仕方がない丁「且那此の正覺さんといふ先生が針を打て下すつたのでありんす客「ナー然うこの夫は正覺さんとやらお初にお目に懸りましたが飛だ御厄介になりました正「どう

致しましてマア〳〵早く沙快成て結構で沙座い升併し御酒い深く召上らん方が宜しう沙座い升客「どうも沙親切よ有難うッィ飲過ては此ンな騒ぎをやるのが是が私の持病で沙座い升どうです正覺さん沙酒は正「イエ私しは沙酒は頂きません客「然うですか夫ちやアこの飯をチィ何の旨へものでこの飯を上て呉んねへアー庇蔭で快い心持になつたと懷ろより金を五両出して客「失禮だが勘定へでも乘て往てお呉んなさい正「どう致しまして此ンなに禮を受ましては客「イヤ沙禮といふ譯ではない何れ改めて沙家へ沙禮に行がエー何所でしたつけね中田甫の荒物屋と隣り合てるアー然うですの近々の中に沙尋ねやすと結構な物でこの飯を馳走成つたから正覺も喜んで夫々へ禮を謀て宅へ歸りました夫から丁度四五日經て療治のら歸つて茶を飲で居る所へ男「沙免なさい正覺さんの沙宅は此方でございますの正「ヘエ誰郎樣で男「エー私まは

先達て丁子屋で癇を起して厄介よなつた男で　正「チー是は〳〵能うとそお出で下すつたサア此方へどうも手挨な所で見苦しうは座いますがどうぞズッと是へ其節は又た頂戴物を有難う存じました男「イヤ御禮ぢやアア痛み入り升　正「どうぞ此方へお出でを願い升男「モーどうぞお掛ひ下さるな一寸正覺さん女衆を貸して頂だきたい　正「ハイ男「鰹に御氣の毒だがね一寸此の手紙を持て芳原の丁子屋へ行て來て貰ひたいので花魁の處から返事が來るから女「畏こまりましたと下女は手紙を持て表へ出る邊りを見廻して居りました彼の人物ハキッと形ちを改めて　男「正覺さん女中を頼んで用のない丁子屋へ手紙を持たしてやつたのは他聞を憚かる秘密の咄だから夫で此う計らつたがお前に些とお尋ねヤす事がある　正「ヘエー何では座い升　男「お前さんの生れハ江戸ですかへ　正「生れハ上總山邊郡東金在の田中村では座い升　男「夫ぢやアお前の親父さんは百姓金左衛門といふ人だちうね　正「ヘエ且那樣能く存じでございますね　男「知つてる處ではないお前が小さい時の名は多吉といつたらう　正「ヘエ多吉とヤました　男「お前の親父さんハ墨の上で病死をしたんでハない不斗した事から冤の罪ヨ陷ちて斬罪の上獄門になつたんだらうね　正「ヘエ何うして夫をお前さんは……　男「サア何から何まで悉皆と知り抜て居る私しだがお前は親父の金左工門の敵を討つ氣ハないか　正「サア敵といふは當時の名主傳右工門といふ人でハ座いますが私しが侍か何のなら目てそ不自由でも必らず怨みを晴さずにハ置ませんが何をいふにも百姓の子竹刀一本持た事のない盲目扶摩迚も敵などは討たれません　男「イヤ目が見ねないといつても敵は敵實はそのお前の親父金左工門の敵傳右工門といふのハ私だよ　正「エーッ……傳「サア驚ろくは尤もだ金左工門が非業の死を遂げてからといふものは私の

評判も惡くなりぼ領主様のら名主役を罷られて據ろなく田畑を賣り親戚の者よ跡を頼んで私ハ有丈けの金を持て江戸へ出て那方へ一日此方へ二日足よ任せて歩行て居中に或る者に誘れて不斗芳原の丁子屋の許へ行き丁山といふ女を買馳染み宜い年をしながら那の道ばのりは別お者で遊んで居る中に持病の癪を起した處か前さんの療治を受け夫から夫へ咄が出て妙な處から前の身の來歴を聞たゆえ初めて前非を後悔し尋常に名乘てお前の處へ尋ねて來た譯お前が敵を討つ氣なら茲に俺の脇差がある のら俺の首を切るとも胴中を突とも勝手にして貰ひたい正「エー モー〳〵敵を討つなどといふ事は私はさら〳〵思ひませんお前さんが敵心をしてアー可哀想な事をしたといふ思召しが浮座いましたらどうか死んだ親父の爲め念佛の一遍も唱へてやつて下さいまし傳「ソテお前の親母さんハ何うした」是もモー死にました

傳「ヤレ〳〵夫ハ氣の毒千万那の時お腹よ子供があつたやうだつたが正「ヘエ私の妹では座いまして夫はモーお咄の出來ないやうな事で傳「ウム然んならば强て聞うとも云ハないが正覺さんどうあつても敵は討たないのへ正「ヘエ眞平浮免を蒙むりたい傳「夫ぢやア私を召連れ訴へをしあさい奉行所へ舊惡のあるものと召連れ訴へをすればお前が手を下さんでも敵が討てる正「イエ夫も眞平浮免を蒙り升傳「然んなら茲に五百両の金を持て居るからお前にツクリ命の代りよ上るのら之を受取て呉るか正「夫も何うも私は頂く譯よ參りません傳「ぢやア五百両の金も取れず召連れ訴へも出來ず私の土手腹を突く事も出來ないか夫では私も改心の印がお前に見せられんからどうか其中一ケ條何れの取て貰ひたいといふ時那方の二枚折の屏風を押倒して這ひ出て來たのは例の勝吉「イヤ正覺傳右工門の身よ代つて私がお前の手よ掛つて死ん

でも宜いからさうぞ傳右工門を助けてやつて呉れ正「イヱ親父さん私は固より敵を討つ氣はありませんといふを聞て傳右工門「正覺さんの父といふは勝「ヤァ兄さんお前は私を見忘れたか尤も此ういふ姿よなつたから顔よ見覺にないか知らんが私ハお前の實の弟常吉の成の果だ傳「扨は其方は弟であつたか思ハぬ處で兄弟久しぶりの對面正「サァ然ういふ譯と知る上は義理ある父の兄さんゆゑなはさら私が手に掛る譯よは迚も參りませんと互よ膝を進ませて押問答の其折柄ハイ侍免よと入り來つたは玉川檢校「段々門口で聞ましたが誠に改心をしたといふ傳右衛門殿のお咄私が餘計の計らひだが正覺とは師弟の中まんざら縁のないでもないから中へ通入て扱のひませう何と此ういふ事よしたらどんあもの五百兩の大金をやるからといつた處が正覺が頂きませうと云ひますまいのら此の玉川檢校がお預り申して私の手から証

文を入れ御入用の節は返しませう夫までは人よ借た附け利分を取て積金をして置き行々是ある正覺が勾頭なり檢校なりの官位を求める時の資金としませう夫が傳右衛門さん侍承知なら五百兩の金を私しへお預け下さいと玉川檢校が一聯兩得の計らひに尤も至極といふので傳右衛門は五百兩の金を玉川檢校よ預けて証文を取りまして先づ話が丸く沿まり傳右衛門ハ旅宿へ歸りまして然るよ又た或時傳右衛門は玉川檢校の許へ參りまして傳「私はモー熟々浮世が忌になつたから昔の罪滅ぼしに出家得道をしたいと思ひますが私ハ代々法華宗信仰の者でありますから同宗の僧で御知己があらばお世話を願ひたいといふゆゑ檢校の周旋で本所法恩寺の寺中安龍院稱山の徒弟となり剃髮を致して傳右衛門の傳を取て傳山と相成りました處が追々修行いたし最早法の眞似事位ハはやる所辨も能く調子も能く何事にも知こなく

立つる所から些かの中に役僧になり檀家の受も宜く彼是まて居ると安龍院の裏山は淺草森下の焦谷稲荷に安置してある本方寺へ轉住いたしたから傳山が其の跡を引受てやつて居る中よ或る年江戸中に疫病が流行りましたのら之れを好機會に當山に安置しある所の七面大明神が疫療除なるを幸ひ之を一ッ捐物よして多くの奉納金をせしめやうといふ慾心を起したるハまだ全たく發心をしないものと見に升乃で玉川校校ュ預けてある金子の中をば百両持て來て本堂の修復を加へ疫療除のお守を出だ志訳法を致す所から固より信者も少なからぬ事なれば日々立錐の地もなきまでに聽聞者が詰掛け奉納金も澤山にあり升然るに毎日やうよ訳法檀の左りの處に縮んで聞て居る一人の婦人があり升年は二十三四色白にして誠に粋な造らへで浮座い升是へ傳山が目を付けて粋な女だと思つて居たが或日訳法済でヲカ〳〵と人の

歸る跡に殘つて居りましたから傳山ハ檀から下りまして傳「内儀さん日々能くお參詣でありますな女「有難う存じ升庇蔭さまで有難いお訳法を聽聞致し升傳「お前さんは何所から來あさるへ女「ハイ私しは本所の花町といふ處に居り升常盤津の師匠をヤすと呼がましう浮座いますが門弟子を少々取りまして数へて居ル升ものでは君文字とヤ升むさ苦しうは浮座いますがチト浮間合にはあそびがてらお立寄りを願ひ升傳「ハイ有難う何れ近々の中にお尋ね申すといつたが縁で二三日經て傳山は立派な袈裟衣を着し君文字の處へ尋ね四方八方の話を致し夫より二三度遊びよ行く中に何日しの傳山と君文字は劇ない中になりました茲に於て二人相談の上君文字を密かよ妾とおし月々の手當を幾らと極めて傳山は折節忍び來つて段々馴染を重ねるに從ひ君文字に無心を言掛けられ玉川校校に預けたる金も殘らず君文字につぎ込み些か

の中に傳山は懐ろの都合と悪とく悪く致し殊よ諸方へ借財も出來た處のら忽ち檀家の耳に入つたから以ての外よ憤り斯る者に寺を預けて置ては成らぬと小諸本山へ右の趣きを入れたから直ち本山より書狀を以て傳山を呼出だしになると傳山は暫しの間も君文字よ別るゝ事を惜めども本山よりの呼出しなれば是非もなく下在中の手當も致し忌々しながら小本諸山を差して出立に及びまた其の跡にて例の君文字は或日の事極彩色にて龜井戸へ參り但ある掛茶屋に休らひて藤を詠めて居る折しも那方の茶屋よ立涙なほ武家四三名の家來を對手に頻りに傳酒を傾けて居られまする是ゞ本所二ッ目には内福の傳旗本にて伊東主膳秀虎とさるゝ殿様では座い升傳酒闌はに及んで主膳殿不斗那方の茶屋を見るよ婢妍窈窕たる姐ぶる美人が居り升主「ヤァ那れよある解語の花幸ひ逃れもなき樣子如何なる素性の者かは知らねど彼

の婦人を是へ連れて參れとの仰せ家來「何れの者の存じませぬが是へ招きましても直に應じまするか如何や主「何うでも尋ねて見いと重ねての主命辞しがたく一人の家來君文字の傍へ來つて云々と申入ると君文字は心中に扱い宜い鳥が掛つたと思ひ家來の者に伴なれて主膳殿の御前へ出で最しとやかのしとなしにて殿の酌をも致し自分も二ッ三ッ盃を受けて其日は程なく別れましたが伊東家にては段々手を廻して聞糺すと常盤津の師匠君文字といふ者と分りましたゆえ用人北村勇馬を呼され彼の者を召使ひたしとの御望みなれば勇馬に於ても今日までゆゞ愛妾の一人もなかつた位なれば之を留めるといふ事もならず奥方御承知の上右君文字の一ッ町で兼て出入の高の助三河屋千次と云ふ者よ頼みましたあら千次が委細承知を致し或日君文字の家へ參り御酒を伏ながら千「時に師匠お前も那んな坊主よ何時までもくッ

つゐて居ても詰らねへが何を物は相談だがは支度金も二百両結ひあゐ手當も下さるが伊東様のほ屋敷へ上つた方が宜いと思ふモシ彼の傳山が彼是れいつて來た時よは夫ア千次が引受てやる向ふは法華宗の坊主一ッ間違へば女犯の罪で傘一本で寺を追拂はれるは知れた事然んな先の見ない者に附て居るよりは伊東様へ上つたら宜らうと千次の話に君文字も固より線香臭い坊主に抱寐をされるよりは天下の侍旗本の殿様に愛される方が餘ッ程宜いと思つたから直様承知を致し二百両の支度金で衣服万端整へまして愈よ右の君文字ハ伊東の屋敷へお妾に上りました然るに半月ばかり經て言譯が屈いての傳山は寺へ歸つて暫しの間も忘れ兼たる君文字の家へ來て見ると造作附賃貸家といふ札が貼てありますのらハテ不思儀と隣りの家で聞合せるとお師匠様は此の先の三河屋千次といふ頭の世話で伊東様といつて工面の宜い旗本へお妾に上り今ぢやア宜い身分になつたと聞き見る〳〵内よ傳山の顔色變じて物をもいはず其所を飛出し數はつた所の千次の家へやつて參りがッと手荒く格子を明け傳「ほ免下さい男「チーほ山でなさい何ですエ傳「三河屋の頭の家は何方らですか男「ハイ千次は家に居るよ傳「御宅ならば日に懸りたい法恩寺の寺中安龍院の傳山と云ふ者が參つたと……男「宜うがす……頭法恩寺寺中の安龍院の傳山といふ坊さんが來ましたぜ千「ウム然うのと云ひながら出て來た千次年の頃ほひ五十四五赤ひ顔の立派な男千「チー坊さん何に來なすつた乃公が千次だ傳「貴郎がお世話で君文字といふ女を伊東主膳様の屋敷へ妾に上たさうですが那の女は私が現在世話をして居る女でござい升然るに一應の斷りもあく他へ妾奉公よ上るとハふは大胆の奴貴郎は夫を侍存じて侍世話をなすつたか但しは知らずになすつたか千「何だとエ知つて世

話をしやうと知らねへで世話をしやうと宜いぢやァ無への乃公ハ北村の且那に頼まれて妾よ上たんだ全体お前は坊主ぢやァねへの寺社奉行へ突出しやァ女犯の科で日本橋へ晒されて上傘一本で寺を逐出される身分ぢやァ無への何を思ひ〳〵れひに來やがつたサァ帰れ〳〵傳「然う何も口汚なく仰しやいませんでも……千「いつたが何うしたんだ総体小癪に障る頭若入だ兼ニ半次此の坊主を摘み出せ「ナーッといふと兼吉半次の両人が手頃の棒を持て出して、兼半「サァ出ねへのと云いながらポカリ殴つた眉間からダ〳〵〳〵と流るゝ血汐傳「ヤァ打ちなすつたな「両「打たが何うした千「兼ニ引張り出せ此の乞食坊主を……二三人の子分衆ハ面白半分手取足取傳山を引擦いで表の方へ突出しました傳山はキッと此方を睨まへて傳「己れヤレ千次覚へて居ろ人の一念何日かは怨みを返さで置くべきやと涙を流して眉間の疵所を押へながら悄然

として立帰つたが此事忽ち評判となり遂よ安龍院を放逐になり行き處もなく昨日に愛つて今日は浅間敷乞食坊主と相成たるも昔の悪業今に至つて罪報の廻り來つた者でありませう

第六席

其年七月半ばの事伊東主膳殿佛参の帰り例のお君を連て通り掛つた亀井戸の天神橋の袂にてペッタリ行遇つたは乞食坊主の傳山でゐり升お君を見るよりムラ〳〵ッと氣もせき上り傳「己れ淫婦女此の浅間しい姿となつたも汝が爲め思ひ知れよと云いながら武者振り附んづ有様に働をして居た仲間が仲「ヤァ乞食坊主己れお部屋様に對して狼藉なす無禮な奴と襟髪掴んで引倒し腰よ差したる長餘鐇の木刀取て仲「此の乞食坊主といひながら二三人で縛け打ち身体綿の如くになり脳骨二ッに打割られ鮮血淋漓と流るゝを主膳殿と君文字は見向きもせずに其儘お帰りよなつて

に打倒れたに傳山は齒を喰ひしばり涙を流し此上へ死んで
ゐみを晴さんと漸く立て天神橋の水面を望み題目一遍身を踊ら
して水中にドンブとばのり飛込んだりか咄變つて此方は三河屋
千次日頃から釣が嗜でございますから只一人扇橋から小舟を借
て深川淨心寺の後ろの川へ出て頻りに竿を垂て居りましたが
思ひの外だなア何處か塲所を變やうかと竿を引上げやうとする
鉤が溝の中へ入んで大分茲は釣れるといふ話だつたが
途端引掛つたは重いもの何だと糸をたぐつて見ると魚でハなく
て水死人であり升ハッと思つて其の水死人の貌を千次がキッと
見るよ道は如何に安龍院の傳山が水刀を以て破られたる頭腦の
パックリ明き血が眞黑よ固まりて天眼といつて兩眼を見開き
流ひてギョッと千次を睨んだやうに見ましたヤア大變だといふ
と突然釣竿を引上て一生懸命糸を取て漕げども〳〵坊主の死骸

が跡を尾て來る樣子流石の千次も眞青よなつてフト振向くと尾
て來るはづ竿の先よ死骸が引掛つて居るのを知らなのつた此つ
づつたと糸を引切と其の儘跡をも見ずして扇橋へ漕ぎ着け上るが
否や貸船の女房が挨拶も耳に入らず一分の金を投り出して我家
へ走せ歸つた頃は最早千次は餘程氣が變つて居り升千「今歸つた
男「頭お歸んなさい大層顏色が惡いが何うしたッです千「ナニ今安
龍院からお前ン所の噂アが墓場の水へ首を縊つたから引取よ來
て呉れと知らして來たから行て來なくつちゃアならねへ男「ナニ
頭姉ぢい向ふの家に居ます千「馬鹿をいへ幾人噂アが居るものの
ェーッ何だつて首なんぞ縊りやアがるんだなアヤア乃公ア行て
來ラア跡を頼むぜとプイと飛出して終つた子分は直ぐ向ふの家
へ飛で行き男「姐さん頭が此々いふ事をいつて安龍院へ飛で行ま
した姐「忌だねへ延儀でもない私しやア首なんぞ縊りやアしない

頭ァどうしたんだねへと心配だから女房のおかねが子分を連て安龍院へ行て見ると千次は目の色を變へて千「ヤィおのれ恐ろしい高へ所へ首を釣つて終やァがつたなァ何だつて然んな高へ所へ登つたんだなァ下す事が出來やァしねへ衆「何だねへ頭私しやァ茲ゝ居るぢやァないの延儀の惡ん然んな事をいつてか呉れでないと漸との事で千次を家へ連歸つたが夫ぎり千次は床に就て發熱甚だしく毎日浮言ばかりいふやうゝなり當今の所謂神經病でもありませうの妙な事ばかりいつて居る中に二年越で漸やく少しく快方に赴きましたが人間といふ者は些と衰へると僻みといふ事の起るものでアー此の乃公の病氣も元はといへば君文字を伊東樣へ世話をしたばかり傳山の死靈にとつゝかれたのだがアノ君文字といふ奴は自分ばかり宜い身分になつて乃公が此ッな苦まんでも見綱に一ッ來やァからねへといふなァ不人情の女

だ宜し乃公も傳山の爲に苦しめられたから乃公はアノ君文字を一ッ引き摺つて來て酷ェ目に遇はしてやらなければ腹が癒ねへと或日人の留るも聞ずヒョロ〳〵する足を踏ん出して我家を飛出し二ッ目の伊東樣の屋敷へ參ると用人北村勇馬ょ會て千「時に且那私の病氣と云のゝ傳山の死靈に襲はれたので二年越しの病氣でも目と鼻の間に居ながら君文字が何うで侍座い升位ゐの事をいつて來て呉ても宜そうなものだ就ちやァ且那の前でぜェすけれど那の不人情の女を殿樣からお暇を願つて引取て行て存分の目に合はしてやり度うは座いますのらどうゞ侍引渡しを願い升勇「イャお前の腹の立つは尤もだが夫は私が屈かないのだのら金子を十兩出すのら是で勘弁をして呉れといはれ今一文の烏目よも困つてる所へ十兩の顏を見たのだから莞爾笑つて千「然う且那樣が仰しやつて下さるのを無理に女を引渡して呉れといふのも無体

でげすかちちやァ仰せに從つて此の十両ハ頂いて參りますと千次ハ十両の金を貰つて伊東の屋敷を出まして丁度三ッ目の橋の處まで來ると病人だのら道が捗取りませんの日がドップリ暮れて俄に降出した雨車軸を流す如く固より傘も持ませんから河岸の薪置場の處へ這入て暫らく雨宿をして居ると安龍院といふ提灯を點て通る者があるのらハテナ安龍院といふ提灯を持て通るなと覗いて見ると傳山のやうな奴だから突然千次は踊り出して橋の上まで追ひ來り千「已れ傳山まだ浮ばずよまどついて居やがるの三河屋千次だ覺悟をしろと飛掛ると男「ヤァ已れは兄の敵三河屋千次かと提灯投捨て組附たるは是れ正覺が義理ある親父の勝吉にて是れ又病後氣が訝しくなり正覺の家を飛出して行衛知れずよなつて居たが安龍院の提灯を持て居たのは何ういふ譯の仔細分らず頭の毛も拔け汚なき坊主になつて居りましたのら千次

の目に傳山を見たのも所謂神經で御ありませう扨両人は橋上より組んづほぐれつすると雖も何れも身体利かざれば去ながら三ィ〳〵の喧嘩の如く遂よ二人共水中へ陥いりて命を落したといふも因果因縁の然らしむる所か然るに翌朝よなつて二人の死骸は本所二ッ目の杭よ掛つて居りましたのら千次の死骸ハ三河屋の家にて引取り正覺が勝吉を引取り共よ埋葬を營みました之を聞たのは伊東主膳殿ァー町人あどゝいふ者は誠に愚な者だ世の中に死靈なぞいふ者のあるべき道理がないと頓と意よ掛ず相變らずお君をば寵愛致して居ますと或日お君は浴湯をして化粧をして居る所へ何所より飛來つたの一疋の虫がンとお君の顔に當つたからァッといふ間よ何れへの飛去りました然るに其の夜の中にお君の顔は一面に膨れ上り些かの間に髪の毛は拔て終ひ恐ろしき姿に變じましたから種々治療を加へたが何といふ腫物

だか解ッとはせんげ屋敷へ参り遠く譯よも参りませんので錦糸堀の下屋敷へやつて折々主膳殿も見舞に参られます或時例の如くに見給に参られて主何うじや氣分へ少しへ宜いか君「ハイ」と前様に涉座いますかとヒョッと上たるお君の顔を見ると不思議や傳山坊主の保に見にたるあら主膳殿よ於てへ未だ傳山は見たる事へなきも噂に聞ては存じなれば己れ傳山と扱打よスパリやつたから耐條以て耐るべきやキャッといつてお君へ命絶死骸を見れば矢ッ張り元のおきとなればハテ不思議やな今我が目よは慌かに坊主の姿よ見にたが扱は君にてあつたるか道へ不便の事を致したと思召したがどうも致し方がない親戚の者もなんのを幸ひ家來よ命じて内々御菩提所へ懇ろに埋葬を致しましたが此後主膳殿は御氣性荒々しく相成ッ少しく涉酒でも召上ると折々御家臣を手打に遊ばすやうな事が御座い升重立たる家臣も悉とく心配を

して畢竟何も涉役を勤めないで我意の驕らゝ所から斯様な事にも相成る次第なれば上へ願つて相當の役を勤められる方繼べしと評議の上時の御老中へ對し伊東主膳事長年の間大祿を頂いて恐れ入いへば相當の御役目を勤め度旨書面を以て願ひ出た處早速十人火消のは役を命ぜられ仮田町御屋敷を賜へましたあら早速大金を出して名代の火消をは召抱へに相成りました或日神保小路の大澤右京太夫のは屋敷へ参られた御歸りにて但ある居酒店の前よてワイ〳〵人聲のするを何事かと與物を留めて覗ねられると同役牧野半左衛門殿の抱へ火消が無錢で酒を飲ま狼藉に及んで居るとの事固より活潑の主膳殿であるから町人火消なれば兎も角涉役火消が斯様なる不都合あつては我々が役目の名譽に拘わる其者を懲らしめろと家來よ命じて散々に打擲致したから其者共は這々の体で我が屋敷へ立歸り頭へ斯々と告る

と怒ち牧野の半左工門殿の耳へ是が這入たのら牧野殿の外立腹致し新參の身分として古參の者の召抱へる者共を打擲に及ぶといふ心得難い宜し出火先に於て目に物見せて呉れやうと私かに時を待て居るを其年十月下旬の事五段長屋尾張侯の屋敷東長屋出火の際大喧嘩に及びたる處牧野家に於ては其の頃の縁族の權威に連れ勢ひる又た伊東家の如くならず從つて此の喧嘩に就ても伊東家の方評判宜しからざる所から重きに咎めも有之べきを悟り老臣池茂左工門といへる當年六十四才の老人一通の書置の文を懐中して牧野備前守の門前で切腹を致しました其の書置の文意は尾張家出火の際の事件に主人主膳に於ては更に與からざる處某し馬鹿よあるて一同の者をば煽動致し右の狼藉に及びたる段深く忍入れ右申譯御主人御咎めの義寛大の御處置有之度嘆願の為め切腹仕つるといふ趣意で御座い升依て段々ほ調べの上両

家共御役御免五十日ヲ、の閉門を仰せ附られた茲よに話變つて彼の金左衛門の忘子お鶴といふ娘は仔細あつて公儀の御家人芳川源十郎といふ人の養女よなりましたトいふは源十郎殿或日一僕を連て隅田堤を通行の時櫻の木の下で拾ひ上たる女の捨子巾着の中に百姓金左衛門長女つると記した物と下總滑川觀音の虫封じのお守と成田山の木札が入てありますが生國は何れとも記してございません愛らしい子であるに源十郎ゞの子供が御座いませんから之を幸ひよ拾つて參り夫婦して可愛がつて育てゝ居りますす中よ五六才よなりますと頗る怜悧の女子よなりましたが ら一層目を掛て養育をして居ると其中よ追々御朋友が出來表へ遊びよ出るとお前は捨兒で今の親父さんや阿母さんゝ眞正のではあい抔といわれるのら家へ歸つて両親に告ると親「馬鹿な事をナすな夫は御友達がのらかうので全たく此の親父さん阿母さん

が一生懸命で拵らへた子だから然んな事を心に掛てゐならんといゐれたが利口の娘であるから夫よりは何となく隔てが出來まして義理ある伊兩親であるかと一層大人ぢくなり何事もいふ事を聞きますから源十郎は何以て不憫が增して參ります十二才の時から學問の傍ら劍術を敎へ受け殊に天の爲せる絶世の美人にて實に鞠御前の生れ變りだなと評判をされるやうになまました時しも弼生の中旬僕一人を連れて淺草觀世音へ參詣いたし其の歸り向島へ廻りて花を詠めながら來りまするを俄に人聲騷がしく喧嘩だ〳〵といひながら走せ出すを何事かと人を分て之を見れば三人ばかりの荒くれたる武士一人の娘を捕へて頻りよ酒の對手を挑むを傍らよ居る父と覺しき老人が樣々に詫入れども聞入ず理不盡ある所業よも及ばん樣子大勢の者夫よ群がり集へども誰一人武士の勢ひよ恐れて之を留める者もなどざいませんかつるは之を見るよ見兼て恐る〳〵氣色もなく中へ入りつる「何れの御方のは存じませんが此の親子の者何か迷惑の樣子をうゞお免しなされて下さるやう差出がましけれど私しよりは詫を致し升と聞て三人何だ貴樣は餘計な所あら口を出して殊よ女ではないの然んなら此の者は免して呉れ私しが代りよ伊酒の伊對手を致し升と此うヤすのの鶴「イヱ私しの侍の娘人樣の伊酒の對手は致しません夫ほどに伊對手がお望みなれば此近所よも藝者が居り升ゆゑ伊招ぎあつたが宜しう伊座いませう忌がる娘をお捕へなすつて無理よ酒を飲め對手をしろと仰ゝやるは夫は伊無理と存じ升が武士にも情とヤすものがは座いませうと喧あめられて三人は再び發する言葉もなく「甲」此奴が〳〵生粹な口をたゝく奴コレ中村骨ッぽいが武士よは適當忌でも應でも此女に一ッ酌をさせやうではないの中「ヲー面白

いと一人がお鶴の手を取り引寄んとする奴を衆て修めた柔術の一手ニーと一壁堤下へ投げ附る續いて一人已れ小癪な女郎がと一刀引拔き切て掛るを身を捻つて空を切らせ横腹烈しく打たれば其儘アッと打倒れた今一人の侍が同じく一刀の鞘を拂ひ切り込んで來る奴を横よ拂つて後へよ廻り襟髮取て水中へドブンと投込んだり其の早い事目にて留らずドッといふ見物の喝采とそは投込んだり其の早い事目にて留らずドッといふ見物の喝采壁暫しは鳴も止まざる位ゐ是ゝ恐れて倒れたる一人も再び向ふ勢ひなく腰を撫て〳〵逃ひ起てヌゴ〳〵として堤下へ逃げ去つたる猫に逢たる鼠の如き有樣でありますす傍へにあつて始終を見て居た親子の者ゝ涙を流して打喜び厚く禮を述て此の處を別れよしたかつる主從も思ひ掛なき事よて暇取たれば歸りを急ぎて立歸る之を那方の櫻の影に見て居られたる主從十三三名の侍お恐ひ見れて深編笠よて面体を隠して居りますが其中目立て一人

立派の方が傍座に升是別人ならずして勤王家の一人島津修理太夫殿で傍座い升今日御家來を召連れお忍びにて親櫻よ赴のれ岡らずかつるが勇ましき働らきを見あつて大ひに感じ玉ひ傍家來へ耳打して跡を尾させて見ると押上なる芳川源十郎の屋敷へ道入りましたから段々近所よて相尋ぬる所源十郎娘つるなる者と相解りました依て其の趣き修理太夫殿へ申上ました然るよ両三日經て源十郎娘つる同道にて傍出でと願ふという叮嚀のお迎ひが島津家から傍座いましたのら何事かと源十郎娘を連て島津家屋敷へ罷出た所修理太夫殿は面謁あつて過る日向島にて其許娘が比類の働らきを見て感腹の餘り何卒自分娘梁姫へ武藝の指南を頼みたいといふ强ろのお頼み辞み難くして毎日島津家傍屋敷へおつるは通勤致す事よ相成りました或る雨の日今日は一宿をする事になり黄昏頃姫君を初め附の方々と種々の咄を致

して居る所へ取次の女中周卒しく夫へ參りまして女「お鶴様へ上升只今押上のお住宅より致て母上様に急病に付早速お歸を願いますとお迎ひの供が參りましたかつるは之を聞て御口まで下つて參り其の迎ひの者を見るとッイア見馴ぬ四十二三の色の黒い目のギョッとした男でございますから鶴「お前が何か父上からの使か男「左様でございます升奥様に病氣でございまして召使ひの方はお親類衆へ差向けられて私しは近所の船宿の船頭で汐時が宜しう御座いますから船の方が早からうと申して川を參つて將監殿橋へ船を着はしてお座い升どうぞ直にお歸りを願ひ升鶴「然うかへ大きに苦勞でありましたと早々暇乞をして右の船頭と伴はれ將監殿橋から船に乘り茲を漕出しましたが此の船が早や大川へ出た頃はひは日がトップリ暮て終つて空ハドンヨリ雨を催はてし居り升然るに此船は段々川上の方へ行きますか

ら鶴「コレ本所へ歸るよは方角が違いませんか船「お前さん抔は陸に居れば脆前ハ宜いが知らねへが水の上へ來りやァ四の五なァいばぜねへ宜い所へ連てつてやるんだ默つて居なせェと俄かに變る船頭の怖面扱は此者よ驚かられしのと氣て用意の懷劍の目釘をしめして身構へたる程もあらせず待受たる一艘の船へ漕ぎ附ました船「且那御約束の通り御供を致しました且「ヤァ大きに御苦勞であつた船「サァお嬢さんお前さんに底根惚たは三方の御武家様がお待なすつて居なさるから茲でシッポリお話をなさるが宜いとヒッタリ附た船と船ドンと体を突たからアッといふまゝ那方の船へ轉び移るを且「大きに船頭大儀であつた約束の金子を取らせるゾ船「是はどうも有難う存じ升頂戴致し升ァシッポリお嫁しみなさい是ハと惚ろくおつるに於てハ船中の樣子を見る船頭らしい者も居りません三人の侍は手丸提灯を前に置き

つるの顔を見て、莞爾と笑ひ、甲「サア芳川の娘おつるどの我々を豈に知はあるまいが當年彌生中旬の事向島の堤にて浮身の鶴よ瓏を受た我々三名女よ稀ある武藝に感じ何者の娘やらんと段々探つて見ると芳川源十郎の娘那れが縁で薩州侯へ武藝の指南に行と聞を實は今日母の病氣と偽つて是まで連出し貴嬢の禮をヤさうといふ所存殊に我々三名共御身の爲に浪人いたし其の御禮を致すつもりだ喃同役乙「左樣別に浮瓏をヤして致しもないが容貌の美い所へ惚込んで我々同では敵はんが水上では動かせぬ舟ゆられて名々が念佛講覺悟を致してゥンと云はつせきたッと驚ろいたるおつる「扨は其の砌りの事を意恨に思ひ我を此の所へ引出だし淫さまんとの結構よな女なりとも其方共の手込に掛る者ならず貴を懷劍もフリと拔放ち寄れば切らんと身鶴へたるを取て押へて手込よせんと三人揃まく押掛るを右よく

いり左りに拂ひ遂に懷劍を持たるまゝ眞逆樣にドンブとばのう陷りまして甲「ヤア肝腎の玉をば逃して終つては成らんッレ此方へ流れたと一人か艦を取り流るゝ方へ漕で行く此方は水底にもぐりまして居る鶴水練が少し辨へて居りますが衣類を着けたるまゝなれば泳ぐ事も自由ならず已に危うく見えたる處へ二丁ばかり那方に居たる一艘の網船がヤ〳〵と云ふ人聲に何のと思つて此方を差して漕來り見れば頻りに水をもがく樣子であるから「船」ヤア水の中に人が居る助けてやれと船を寄せ浮む所を引上ると丈の黒髪ふり乱し玉を欺むく美婦人なれば「船」モシ御婦人確かりおしなさいと飲んだる水を吐せ両人の船頭親切に介抱を致した甲斐あつて己よ絶命に及んだるおつるは漸やく心附き細き息をホッと吐きつる「只今是々の大難に出過ひました處ば助け下され難有う存じ升「船」モー大丈夫でげす浮安心なせエと段々姓名をも

尋ねますと押上の芳川源十郎の娘といふに船「夫では私の直き近所私しは矢張り押上に居る船頭の萬五郎といふ者でございす丹兎も角私の家へお出でなさい夫からお宅へ伺送りやうとッコ〳〵に船を漕ぎ戻し我が家へ歸つて女房のおりんよも是々とすとりん「夫はマア宜つたと夫婦親切よ介抱の上早速芳川の方へ斯々の次第と云つておつるを送り届けました源十郎夫婦も大ひに喜び万五郎方へ厚く禮を致し是が縁で万五郎の女房おりんは屢々源十郎方へ遊びに參りますんは若しや我が娘のつるにてはあらぬかと思へど夫とも云い兼て只だ羞はしく思ふまゝ何のに事寄せ來りましては泊る事なども度々浮座い开然るに早くも之に氣の附た源十郎ハテどうも此間中から來るおりんの係と娘つるの係と能く似たるは角田川へ捨兒をして入水したつるの母ではないかと心附き折かあつたら

何うか尋ねて見ようと思つて居る中ま或日家内中出掃ひ源十郎只一人獨酌で一盞を傾むけて居る處へ折よく來つたは例のおりん源十郎は幸ひ今日は誰も居らねば尋ねて見んと酒の對手をさせながら源「時におりん今日は誰も居らんから話をするが隱して往んよ私の娘つるは那れはお前の實の子だらうね隱しては往んぞは私が十何年といふ前の事だが朝櫻を見に行た時人ッ子一人居なのつたが是々此々と前々の事を物語つて源「今度圖らずか前の亭主に娘の危難を助けられ夫が縁で此うして姑終出入をして居るが何うも樣子が他人とは思はれぬが私の推量通りお前はつるの母ではないかと云はれておりんも隱すに由なくりん「實は斯々の次第にて娘を遣して投身をいたした處今の亭主万五郎よ助けられ家へ連れ帰つて段々と厚い介抱を受け其儘世話よなつて居る中万五郎も獨と者私しとて度々夫を重ねるは女の道に背

くと知りつゝ身の置所なきまゝよ万五郎の心に從ひ夫婦となつて居りましたが御當家様の御娘子係しといひ其名を云ひ我が捨た子よ嬉しと思へど今更親ぢや母ぢやと名乘りも遂て出來兼ますれば只だ外ながら我が娘と慕はしく思つて居ましたし子を捨るといふは鬼よ均ぬ邪慳な奴とお下げすみも浅座いませうがどうぞ免し下さいまし那れまでに御養育下されたご恩のほど必らず忘れは致しませんと涙ながらよ物語る源「ゝ夫で分つた何でも然うだらうと思つた然う聞て見ればお前の方へおつるを返すが道か知らんが實は私も外に子はなしどうぞ此家を繼せたいと思ふのらお前達夫婦へ是から先二人扶持上るから私に那の娘は呉れるやうに願むりん」恐れ入ります何う致しまして捨た子供をお拾ひ下すつて立派に育てゝ下された上尚私共までが浅心配を掛まゝまゝて相濟ません源「イヤ〳〵夫は然う

でも已よ濁れて死ぬ所を万五郎に救われた其の恩を謝する爲お やと話しの所へ妻娘打連れ立て歸つて來たのら話ゝ外に紛らして程なくかりんゝ立歸り万五郎よ右の話を致し乃で一統打解けて夫から愈よ面白く世を渡り源十郎方のら月々二人扶持を送つて居り升中に茲に圖らずも源十郎大難を受るのお話し

第七席

或一日芳川源十郎万五郎を連れて回向院へ相撲を見よ參りましたる其頃はひ稲妻雷五郎大野松緑之助といふか東西一對の力士よて最負も多くでざい升然るに此日は両國の顔が合ふので場所ゝ立錐の地もなきまでの大入頓て取組に及び稍暫らく挑み合て居ましたが終に大野松の爲に稲妻は土俵の外へ投げ出されましたれば大野松最負の者は最寄の割烹店へ招いで勝相撲を祝ひ馳走を致しなどする中に芳川源十郎は性來粹の人であるのら勝

た相撲へ誰でも呼ぶが乃公は負た相撲を呼んで馳走をしてやるといと岡國の青柳といふ料理屋へ稲妻を呼んで散々馳走を致し闘取は勿論供に來た弟子の者へも祝儀を出し宜い心持に酩酊をして茶屋を立出で途中にて稲妻師弟よ別れを告げ万五郎は土産物を片手に持ち片手に背柳と記した提灯を提げて先よ立て行く跡から芳川源十郎一歩は高く一歩へ低く跟々蹌々として來りしへ本所名代の報恩寺橋折ふもパラ〳〵パラ〳〵ッと黒扮装の侍現はれ両人の前後を取巻たのら源扱へ物取りか但しへ拙者に意恨あつて此の所へ待受たるか若しくは人違ひの者なるかとキッと左右よ眼を配れば前に進んだ一人が甲「アイヤ人違ひでもなければ物取りでもなし我々共へ汝等親子の者よ恨みあるもの先刻より是に待受け居たり覚悟よ及へとズカ〳〵ッと詰め寄て才メを見て万五郎ヤア是は大変且那様の汚身の上慈じ此方等が手出しをし

ても敵はぬのら早くは宅へ逃知らせヤさうと一散走りにドン〳〵ドン〳〵飛來つてドン〳〵〳〵〳〵万五郎では座い升どうぞ一寸お開けあすつて……何事ならんと下女に命じて門を開けば物をも云はず飛込んだ万五郎云々斯々と息を切ての注心よおつるは大ひよ驚ろいて扱へ我が身の事よりまて父上の汚身の上に及ぼしたりと心得たれば鶴「母上留守を願ひまするとゝ襷綾なる甲斐〳〵しくも長押よ掛たる薙刀をば小脇よ掻込み草駄天走りよ來つて見れば道は如何よ父源十郎は七八人の侍を對手にして右に拂ひ左りに避け一生懸命防げども寡へ衆よ敵せずして己よ危うく見たる場合おつるに於ては物をも云はず後ろの方よりヤッと一撃一人の侍を薙ぎ倒しました是よ力を得たる所の源十郎娘よ班を負はしてへ相成らんと益々勇氣を現へし親子共よ必死の働らきを爲すと雖ども遂き所を走せ來つたるゆゑよおつるは息切れ

思ふやうにも力續あず如何はせんと思ふ折柄俄のに物影よりいたして雨霰の如く烈しく打出す礫に驚ろき侍原ハ右往左往へ散乱致しました抑も此の礫を打たるは例の伊東主膳殿よて此時同じく相撲見物の歸りよて最前より此の有樣を見て居たるに少し親子の者の勢れたる樣子に其場へ出でゝ助太刀あすは後日の妨げと思召され礫を投て狼藉者を追拂はれた者では座い升乃で一同の散乱したるを見て夫へ現はれ深手を負たる源十郎を介抱いたし互よ名乘ッ合ひ源十郎ハ駕籠よてかつる万五郎が附添て立歸り主膳殿主從ハ錦糸堀の下屋敷へ歸られましたが是が原因で源十郎ハドッと枕に附き種々手當を尽しましたが命數の尽る所か遂に黄泉の客と相成りました伊東主膳殿に於ては之を氣毒よ思ハれ葬送の節も自ら見送られ跡々の事も種々親切よ世話を致されかつる母子も深く之を喜び頼母しき殿樣と折々親子

打連れ立て伊東家へ罷出る位ゐよ相成りました然る處去る者日々に疎しの仮令の通り後家のおたきは源十郎死去の後ハ獨り寂のねやさびまく俗にいふチヂ、コ芝居の役者にて坂東龜三郎といふ者に馴染め悉とく現を抜かして家の有金ハ勿論主膳殿から百金二百金と二度三度借受け之れ皆龜三郎よつぎ込ミ其不品行官語同斷かつるも游々之を知れども育ての親と知るからには悠じ云ひ立して羞を與へるも惡ミと知らぬふりを致して居ると主膳殿ハ兼てかつるよ心あつてこそ多くの金もおたきへ借し與へ其の心に靡かせんとの計畧なれば折を伺ひおたきまでつるを妾に爲ゑたしと申入たからおたきに於ても是れ倖儀と詔を巧みよかつるを訟き伏せ家の爲め親の爲といふを名として頻よよかつるに頼み入れぞしたからお鶴も今は之を辞む事叶はざる仕儀となり心よハ澄まねど浮世の義理と諦めて終に主膳殿の心よ從

ふ事となりました然るに間もなくおつるは妊娠を致した樣子よ主膳殿は愈よ寵愛彌増して奥樣も今は疎ましくなさおつるが身二ッになる上は奥方は離縁を迫いしつるを奥方よ直すといふ思召し早くも夫と悟つたる奥方はこれ我が身の一大事と夫よりつるを嫉む事甚はだしく重臣の面々いたく之を心配いたすと雖ども別よおつるが惡人といふでいなく迫ばれの賢婦にして少しも谷むる所が毫座いませんから此者を遠ざけんと君を諫むる事も出來ませんおつるよ於ても奥方の心中を察し如何爲して宜らんと千々に心を碎きまして里方へ至つて母よ相談致さんと思へども母のおたきゝ情夫の爲に魂有頂天外に飛ばし何事も相談對手にならずされば とて犬死なすも身の耻辱と左つ右つ思案の末命内藏之助と云る人に内々意中を打明し如何致して然るべきのと相談よ及びましたから拉に談て命内藏助伊木重左工門小池内藏介

北村丙馬等評議を凝し一同お鶴に向つて何卒かん身の一命を頂戴致し度く其の次第は斯々斯樣〳〵と細のよ語つて各々悉とく手を仕ての頼みおつるよ於ては固より貞操正しき婦人にして君の家の爲に一命を捨るゝ屑とも思はざる實に稀なる女であるから少しも臆びれたる氣色もなく快よく承知致しました茲に又た伊木丈左工門の悴秋三郎といへるは家中評判の美少年にて今年十九才近習役を勤めますが是又た忠義無類の男であるますから秋三郎もおつると同樣に言ひ合め両人とも悉とく覺悟よ及び私かに一同別れの盃を致して時刻の來るを待て秋三郎はおつるの部屋へ忍び頻りよ何か話をして居り升主膳殿は近臣を對手よ酒を召上つて毎夜の如くおつるの所へお出でよあると何か密々話壁が致すのらハテ何奴であるかと襖へ耳を附けて聞かれるといと睦ましく用人伊木丈左工門の悴秋三郎と密話の樣子鶴「秋三郎

さま貴郎は此間中より妾くしへ跡形もない事を仰しやいますが妾しも殿の機嫌を取るのゝ忌では座い升殿は奥様を離縁して私しを跡に直すと仰せがあれど万一奥様に直れば殿の様のお目を忍んで此様に貴郎と楽しむ事が出來ませんから矢張り此うして居り度うは座い升此のお腹の子も御前様は御自分のお胤とのみ思召して被爲入いますが決して然うではなく此の子は貴郎の子よ相違ありません何事も此の上は殿のお髪を撫へまえて折々貴郎にお目よ懸るのが此の上もない樂しみどうか末長く私しを見捨て下さらぬやうに願ひ升と睦ましげなる話ぶり固より强膽活潑ある君であるが上に充分御酒を召上つて居るから扨は先日中よゝ奥を離縁して彼を奥に直さんといふを通常なれば喜ぶべきに却つて意見がましき事を云ひしは表よ家來共の前を憚かる僞りの口上私かに秋三郎と不義を働らき居つたるか最早用捨は相成らんと

突然唐紙を蹴開き躍り込んだる主膳殿主「此な不義者其處動くなと扳討におつるの左りの肩先より右の乳の下まで切り下げ返す刀で秋三郎の右の肩へ切り込まれた此時両人ハ一聲に前暫らくヤ上たい事がは座り升どうゞ是を見聞下されと懐ろより取出だしおつるが差出したるは諫書であり升何事なるかと主膳殿之を取上るを合圖に後ろの唐紙引開いてハッと平伏あしたるは命伊木小池北村の面々主膳殿は合点行のず諫言書を開ひて見れば奥様をは離縁なされ妾を跡に直さんとの思召し有難き仕合せに存ずれども奥様には已にお二人までもは愛子を擧げられ今さら何の罪あつて之を去り玉ふべき道ならぬ事にて御離縁なされし其跡へ何の面目あつて妾が直りゝ事の出來べきや畏竟妾があれば こそ殿の御心を煩らはし參らす事誠に恐れ多き事に存ずれば私かに御家臣方と相談の上秋三郎と不義の体に計らひ恐れなが

ら君の涙怒りよ解れ涙剣に掛つて相果可申いあれ願へくは涙心を改ため元よ倍増し奥様をば御大切に遊ばされ離縁の事思ひ留まり玉へるやう願ひ上奉つるといふ文意でありますから主膳殿大ひよ驚うきァーつたり〳〵我れ一旦の怒りに任せあたら忠義の其の方共を手に掛しは面目ない必らず其方等の諫めを容るよ依て安心をして予の心得違ひを免し呉れよと涙を流して後悔の体並居る家臣ホッと息を吐て安堵の胸を撫下す處へ夫と聞附て奥方もお出でになり両人を介抱し其志しを喜び且は悲しみ手を取て涙に暮れ一同は只だ詞もなくして茫然たりかつると秋三郎の主膳殿と奥方の言葉を聞て安心せしが其のまゝガックリ前へ伏し早や息は絶へました乃で伊木丈左衛門へ御手當金三百両倘五十石の加増よて秋三郎の死骸は丈左衛門へ引渡されました又おつるの死骸は母のおたきを呼で委細斯々と申含めて引渡し金五百両に先々貸與へたる金の証文を卷て遣はしましたのらおたきは相變らず坂東亀三郎に迷つて居るのら此金を費ひ結句邪魔物を拂ひし心地にて死骸を引取り埋葬を致し家督は親戚の中より要之の進どいふ幼兒を養子よ貰ひて之に繼せました其後主膳殿奥方に又々ぱた子息ぱ出生以前よ増してぱ夫婦中は睦まじく相成りました然るに其の翌々年の十二月二十七日即ちかつるが三回忌の當日主膳殿佛參を致されます此時鉄砲を持て行けといふを命内藏助ぱ佛參に鉄砲ぱ持參は如何なものでぱ座りませうや主「イヤ歸り掛に小鳥狩でも致さうと思ふと何事も氣よ掛ざる主膳殿野服を着され一口召上つて宜い機嫌になつて鉄砲を携さへかつるの佛參に參られ其の歸途久しく芳川へ參らんのら今日は法事の事ゆゑ訪問てやらんと押上の芳川方へ立寄られました

のらお瀧も喜びぱ酒等を以て待遇庭の景色を詠めながら四方八

方のお話中「此の泉水に例年今頃になると鴨が下りますが當年はまだ一羽も下りません尤も昨年から餌が尽きました故のとんと下りません要之進や御前をお庭へ涉案内ヤしや主膳殿喜んで鉄砲を持てお庭に出で泉水の周圍を廻りましたが鴨は一羽も下りません甚だ本意ない事に思召され立歸つて伺御酒を召上つて居ると折しもあれ雲井遙かに一羽の鶴の飛行くに早くも目を附た主膳殿突然傍へに置たる鉄砲を取たから命倉之助「何を遊ばします主」「何よりの土産ァノ鶴をば打留て倉」「是はしたり御當所は將軍家御成先殺生禁制の涉場所でございい升と留めんとする中早くも主膳殿よ扨ては狙を定めて一發ッドン右の鶴を打落しましたハッと一同思つたが最早仕方がありませんお庭内へ落たる樣子であるのら那方此方を馳廻つたが庭内よは見にません慥かよ隣りの寺中即ち十八檀林の中の普光山靈山寺といふ寺の中へ落た

ものと分りました是には主膳殿も大きに閉口いたしたがどうも此まゝに濟されません據ろないのら先方へ詫び右の落たる鶴を受取て參るやうよといふので命内藏助靈山寺へ罷出で住持當覺に面會を致た是々斯樣〳〵と事情明白にヤ述て何卒鶴を渡して貰ひたいと云ひ入れたる處當覺以ての外に憤はり散々よ罵りたるのみならず此旨其節へ訴へ出ると何といつても聞入ない據ろあく命内藏助立歸つて是々と殿へ言上に及ぶと主膳殿も顔色變つて後悔の体でありましたが如何とも致し方がでざいません悄然として屋敷へ歸られたか心鬱々として樂しまず氣散じの爲め又々奥を涉對手に涉酒を上つて居られる折如何なしけん一人の侍女「アレつるが……」といふ一聲發すや已れといつて主膳殿扳討に首を打落たました此の侍女は別人ならず命内藏助の獨り娘今年十五才の乙女よして奥樣のお附であり升一同ハッと叱驚爲し

何故にお手打を右左りより問ひ掛れば主「予が一大事を口走つたゆゑ手討に致したつるが落たとは何だ」「イヤ所は只今彼が持參致しましたるは土瓶の釣が外れましたのでアレつるがとヤした事と心得ます」主「扨ハ左樣であつたかアー不便の事を致したと奥方と相談の上其の死骸を命内藏助へ引渡し悉とく其非を詫て懇ろなる埋葬を營めとあつて金子五百両を下されましたから命内藏助最愛の娘なれども君の爲に果たる事ゆゑ心を殘す所なく死骸を引取りました然る處浮門前俄かの人聲何事かと家來が門前へ出て見れば上使とあつて三番頭の方々が出で即ち浮小性番頭の活野主計頭大番頭横田備中守は書院番頭齋藤内藏頭が入り扨ハといつて主膳殿初め用役一同麻上下着用ば三方を浮書院へ浮案内致し遙の下つて平伏を致す「上意其方事將軍家ば成先中に於て砲發を致し剩さへ十八樫林の中普光山靈山寺の境内に鶴を打落し段不届の至り後して浮沙汰有之まで叱度謹しみ仰付る者也

との上意を諫て立歸り一日置て龍の口評定所へ浮喚出し相成嚴重の浮沙汰有之べきの處格別の思召を以て本家伊東修理太へお預け家名斷絶ヲ附られました主膳殿謹しんで受に及び三日の中に屋敷を引拂ひ奥方と共に修理太夫殿へ引取られましたが後日伊豆國修善寺といふ所へ蟄居いたしました扨此方は家中散々離々に相成たる中よ命内藏之介靈山寺の住職が人を助ける役であります為に御家の斷絶に及びたるは恨みても尚餘りあり彼が如き無慈悲の僧を尊とき寺院は置く時は佛道も遂には消滅せんと是非を論じて公儀へ諷諫に及びました處公儀の役人一統之を尤もと心得將軍家へ伺ひを立たる處是れ出家の致す所にあらずとあつて遂に追放に相成りました其の翌年當覺は段々と積年の惡事報ひ來つて身体利かなくなり所

謂ヨイ〳〵同様の姿となりフラリ〳〵両國橋を通行の際那方より來つた深編笠を冠つたる一人の浪人當覺を見るより侍「己れ靈山寺の役僧當覺拙者の面体見忘れはしまい伊東家の家來命内藏介汝が出家にあるまじき訴人をせしより我が主家斷絶に及んだ恨の刄受留めよと切て掛るを當「どうぞお助け下さいましとよろめき〳〵這ふが如くに両國橋を東へ逃げ横網まで逃延てとある立派の冠木門の中へ欠込ました此家は中の島正覺の家にて當「どうぞ助け下さいと轉込んだる出遇頭に出て來つたは年頃四十五六の婦人女「ヤアお前は倉吉ではあいか當「扨てお前は姉のかりんのエー面目れへ免して呉れ助けて呉れといふ間もあらせず逐掛來つた内藏介切らんとするを當「マア待てお呉んなさい最う此うなれば絶体絶命逃も隠も致しませんと己が悪事の懺悔話念佛一遍唱へた事のない倉吉が何うして靈山寺の役僧になつたといふに至くい靈山寺へ押入て役僧當覺を殺害し己れ其の跡よ直つて何食はぬ顔を爲し居たるといふ事明瞭に自白よ及んだから内藏介もおりんも只呆れ迎つて詞もなく其の所へ正覺も來り段々との物語り倉吉は己に姉甥よも遇たれば何日までの罪を重ねんと全たく悔悟の様子であるから相談の上命内藏介へ引渡し内藏の介より町奉行へ召連訴に及びたる處舊悪重なりお尋ね者の倉吉であるから直様入牢が調べの上死罪獄門の刑よ行なはれ命内藏之介は主家の恨みを晴しましたさても中の島正覺は愈よ評判高く只今ヤ上る横網へ立派の家を出來て實母おりんの居所も分りましたから万五郎を共よ之を引取り安樂よ世を渡り今日に於ても本所に其家歴然と遺つて居り升

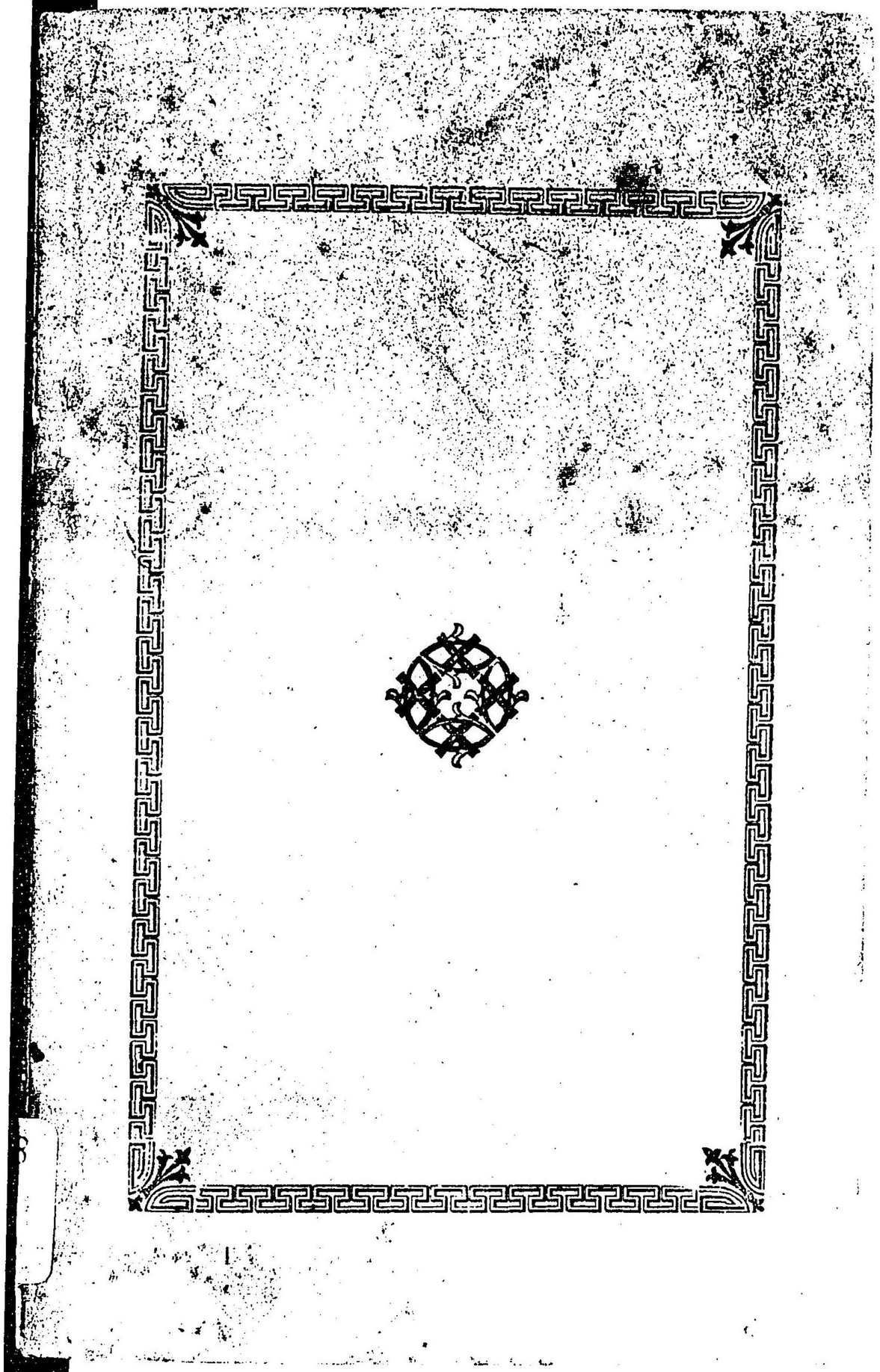
政談鶴の一節終

明治廿六年五月三十一日內務省許可
仝　廿七年六月　三日印刷發行

一冊　定價金拾三錢
郵稅　金四錢ッヽ

編輯兼發行者　神田區南乘物町十五番地　鈴木源四郎
印刷者　神田區南乘物町十五番地　小宮定吉
發行所　神田區南乘物町十五番地　九皐館
印刷所　神田區南乘物町十五番地　九皐館活版所

版權所有

大販賣所

淺草區三好町　大川屋書店
日本橋區本石町二丁目　上田屋書店
日本橋區通三丁目　金櫻堂書店
神田區裏神保町　文錦堂書店